
Muv-Luv -3rd story- 世界への介入者

Oka Nieba

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Muv-Luv -3rd story- 世界への介入者

【Zコード】

N4268W

【作者名】

Oka Nieba

【あらすじ】

天地無用！に転生したオリ主がある事件をきっかけにMuv-Luvの世界に飛ばされます。

なぜMuv-Luvの世界ではナチス・ドイツが強かつたのか。どのようにして世界は構築されたのか。

オルタネイティヴ計画とは何のための計画なのか。
独自解釈モノですので、お気をつけください。

また、武は出ますが、あまり対応がよくありません。
マップラブ主要キャラ等が消される可能性があります。

恋愛要素は…低めになりそうです…。

世界背景：天地無用！、舞台：マーブラヴ、設定：アウター・ガンダム、
フルメタル・パニック、Dies irae、パトレイバー、He
ll sing

第〇話・二命の原神達の画策（前書き）

こんにちは。

初投稿になります。

よろしくお願ひします。

11／3 訪希深の発言「姉者」「姉さま」に変更いたしました。

第0話・三命の頂神達の画策

「三命は三命の頂神が張つた結界内。

誰にも干渉される事は無い」の中、一人の男の遭遇について話し合っていた。

姉さま、 には我が管理する世界に行つてもうつが構わぬな？

その次元はどうなつているんだい？

なに、”所詮”は研究目的に創つた世界。 が潰しても一向に構わぬぞ。

はあ～。あたしは”そんなこと”聞いてるんじゃないんだよ。
また”Z”みたいのが出てこられても困るつて事を言つてるんだ！！

今回は を成長させるのが目的なんだよ！

そもそも今回の件だつてあんたが変なちょっかいを出さなきやこんな事には…

わ、わかつた姉さま！わかつたから注射器を下してくれ！！

が死ぬような所ではない！地球人のいる世界だから大丈夫だ！

本気を出さなくとも大丈夫…

といつよりも姉さまだつて遊んでいたくせに、なぜ我だけが悪いのだ！

訪希深、あんたのはやり過ぎなんだよー。やり方つてものが…

んんっ！…お戯れはそこまでこじませんか？

瀬戸殿も ちやんも我々を待っているのですから。訪希深の世界も”そぞぞ悪く”ありませんでしたよ。

津名魅が言つんなら大丈夫だね。
じゃあそこに行つてもうおつかい。あたしは に説明するか
ら瀬戸殿は頼むよ。

解りました、鷺羽姉さん。

あと、お願ひが一つ…

ん？珍しいね？びついたんだい？

訪希深の世界が終わつたらその…

私の世界に ちやんを入れたいのです…

まあ、裁量はあたし達に任せられてるからいいんじゅないのか

い？

でも何でわ？

そ、それはその時にお話しさせていただきますので！

ちやんこよろしく云えといてくださいー！

それではお先に！

ああ…

不思議に思いつつも鷺羽もその場を後にする。むくれている訪希深
を置いて…

第0話・二命の原神達の画策（後書き）

読みづらい。
⋮

第1話・灘みの中で笑う鬼と蟹（前書き）

天地無用！GX-Pはアニメ版の知識しかありません。
また真備清音さんだけは登場しますのであしからず。
このへんは独自解釈です。
それではどうぞ。

第1話・濁みの中で笑う鬼と蟹

第一世代艦「水鏡」のメインブリッジ。ここは今、暗い空氣しか立ちこめていない。

所以は、第二聖衛艦隊司令補佐官の無期限休職命令である。樹雷の裏の最高権力者であり、水鏡のマスターである神木瀬戸樹雷の判断は間違っていない。

實際、休職命令というのは人材流出を防ぐ一種の手段である。ただ“無期限”という言葉が彼女の部下達の心に引っかかっているのだ。

「瀬戸様…どうにかならないのでしょうか？」

この男、平田兼光は神木家第七聖衛艦隊司令官にして「瀬戸の剣」と呼ばれる豪傑である。

それほどの逸材が、今回の判断は非の打ち所がないという事実を受け止めながらも、この空気に耐えきれず皆を代表して言った。

「だからねえ、これは決定事項なの。

わかつてゐるでしょ？いくら何でも今回は隠しきれる事じやない。私だつて命令したくないわこんな事。それに、津名魅様の御言葉も頂いてるわ。

まあ……確かに気持ちわかるわよ。

結果はどうあれ水穂、林檎達を助けたのですもの…

あつーそこは地雷！

聞き耳を立てていた部下達は恐る恐る一人を見る。

柾木水穂、神木家第三艦隊司令官兼情報部副官にして「瀬戸の盾」

と呼ばれる聰明な女性である。

そんな”彼女の”補佐官が自分のせいで今までに裁かれようとしている。

否、裁かれた。

そう、これは決定事項。決して覆る事のないもの。休職命令だけなら良かつた。いつでも会えるから。だが、彼女そして補佐官に近い者だけが知っている彼の本当の遭遇。三命の頂神によって異世界に彼が送られる、つまりは島流しなのだ。しかも”無期限”の。

心中穏やかでは無いのは当たり前だ。

それは林檎も同じであつた。

立木林檎、瀬戸配下の経理部主任にして「経理の鬼姫」と呼ばれる理知的な女性である。

二人とも俯いたまま何も言わない。

下唇を咥え、言葉を出すのを必死にこらえている。耐えるように体は小刻みに震えている。

「はあー。ヤダヤダ。

この重い空気をどうにか出来ないかしら?
仕事が進まないじやない。

三日よ三日。何時まで引きずつてゐるのよ。」

瀬戸はあきれたように扇子を広げたまま上げ、彼女たちを挑発する。それでも動かない。何も言い返さない。ビクつく部下達。悪循環である。

10

流石の瀬戸もじびれを切らし扇子を力強く閉じた。

それと同時にとてつもないプレッシャーが当たられる。

「水穂ツ！林檎ツ！ふざけるんじゃないわよー

あんた達がそんなのでどうするの…！」

「「「」」

樹雷の鬼姫ここにあり。この鬪氣を流せる者など、ここにはいない。

「大体あんた達そんなことで彼が喜ぶの！？」

まるで彼が死んだみたいじゃないか…と思いつつも言ひ。だが彼女らは未だに俯いている。

「「すみません…」」

それしか言い返せなかつた。

そしてそのままブリッジを後にする。

「待ちなさい！話はまだつ…」

…っは～。どうすりやいいつてのよ。私は。

私だつて引きこもりたいわよ。

でも…と思った所で秘匿通信が入る。

彼女もブリッジを去り自室で回線を開く。

相手は白眉鷺羽だった。

「大変そうね、そつちも」

「と云ひことはやうぢりでも？鷺羽”殿”」

「まあ……ね。」

と、苦々しく返答する鷺羽。

柾木家も同じ空氣。二人とも大きくため息を吐く。

「あの子は無事に飛ばせたよ。」

不意に本来の用件を伝える。すると瀬戸は遠い目をしてつぶやくよ
うに話す。

「そうですか…早く帰つて来てくれる事を願いますわ。
私の為にも。」

「大丈夫。きっと立派に成長してきてくれる。
私たちが育てたんだからさ。」

「では私たちも…という激励ですか？」

ふふふ…と手を口に当て上品に瀬戸は笑う。
そう、それしか無いのだ。

「水穂殿と林檎殿は津名魅に任せたから、大丈夫。」

「あら、それは助かりますわ。此方も打つ手なしで困っていたので
すよ。時に、真備清音殿は？」

「それも津名魅。あの子が打つ手は良さそうよ。」

ふつふつふつ…打つて変わつてマッシュな笑いをする鷺羽。

それもこれも彼が一つ田の世界を終わらせてからだけど、と一言付け加えた。

瀬戸にとつては不安材料でしかないがこれも計画の為、仕方がないと相づちを打つて答えた。

二人とも心なしか顔色が良い。

「それでは瀬戸殿。」

「それじゃあね、鷺羽”ちゃん”。」

二人は英氣?を養い通信を切つたのであつた。

第1話・瀬みの中で笑う鬼と蟹（後書き）

うへん。

本編行かないなあ…

と言うより瀬戸様のキャラが難しい。

オリ主の細かい設定は存在しているのですが…

これは小出しか、もしくは別の機会に。

第2話・ズレた感情（前書き）

まだまだ影の薄いオリ主…

11 / 3 訪希深の発言「姉者」「姉さま」に変更いたしました。

第2話：ズレた感情

桝木家の一畳程度の広さの物置だったその部屋は今、ある女性の研究室と繋がっている。

この部屋は…いや、一つのスペースコロニー…

否、星々の集まりが、彼女の研究所と化している。

2012年12月25日現在、地球上でこんな技術を有しているのはただ一人。

何を隠そう、彼女は宇宙一の天才科学者、白眉鷲羽とはこの方であるツ…

てつてれ〜

ムフッ、ムフフフフ…と自画自賛しているのもまた彼女ただ一人である。

そしてそれが事実なのも確かである。

彼女は今、そんな広大な研究所のとある一角へ向かっている。

そこは白眉鷲羽が認めた、最初で最後の弟子に預けた研究室である。

彼は本当に不思議な子だった。

この天才がいくら調べても、摩訶不思議の言葉しか出てこないのだ。長神の力を持つてしてもなにも解らない。

もはや解析不能、というのは少し語弊がある。

わかっていることは”長神の力を受け付けない”という事。

つまり彼が存在している次元は巻き戻すことが出来ないので。

そして、彼が存在している次元はここしかない。

よつて導き出せる答えは…

つと、そんな物思いに耽つてゐる間に部屋の前に着く。

「んんっ…」

これから彼を別の次元へ飛ばすのだ。

あの事を引きずつてなければいいのだけど…

と思いつつノックを四回打つ。

案の定返事がない。

やれやれ…と首を振りつつ、しつれいするよーと言一ながりドアを開ける。

そこにいたのは、地球で言つ置間に指を当てた「考える人」だった。

「ひつじこ顔してゐるじゃないの、あんた。」

怪訝な顔で鷺羽は一人の男の顔を覗く。

すると、完全に瞳孔の開いた深紅の眼差しで見つめてくる。

「私の…罰は決まりましたか…鷺羽様…」

ああ…ぬ無しじゃないかその顔は。

鷺のような鋭い眼光。女性のよつと整つたその容姿。

「…いつものよつと『マッシュ』とは呼んでくれないのね。まあいいわ。

あんたは、まず始めて訪希深の管理する世界に行つてもいいわ。」

「それだけでしょつか…。」

「んにゃ、それプラス訪希深と”契約”をしてもらひよ。」

一瞬彼の肩が跳ねたような感じがした。

そして何処からかポンッと音を立てて、可愛らしい訪希深が現れた。

それに何も反応せず彼は尋ねる。

「して、その契約とは？」

「ハつある。

1 約束の日を地球上における敵対地球外生命体を駆逐した日と定める。

2 この日まで戦い続けなければならない。

3 この日まで力を解放してはならない。

4 この日まで決して逃げたり死んではならない。

5 人類に一人だけ自らの主を定め、この者を守護する事。

6 約束の日が訪れたとき第5の契約は破棄される。

7 これが行われた時、火星を奪還する事。

8 これが行われた時、訪希深との契約は解消される。

以上だ。

わ、我としては を送りたくないのだがなつ
姉さまがどうしてもと言うから仕方なく…」

と、頬を赤らめ自分の人差し指を付けたり離したりしている。

「あ、あ、ああ！

もう！あんたはしばらく黙つてなさい！！」

本当にやつかいな子だ。

”Z”の一件以来、訪希深は妙に余所余所しくなつていけない。

「はあ、それで飲んでくれるかいな？」

「飲むも何も。」

無感情にただ従うだけ。

彼には今何を言つても変わらない。

それなら事を進めて帰つてくるのを待つのが正解だ。

「ん、じゃあ飛んでもらうよ。

訪希深、頼んだよ！」

「それでは 行くぞ！！

ずるずるとピクニックに行くように彼を連れて行く訪希深。

はてさて はどんな風に帰つてくるだらうか。

瀬戸殿にも報告しなきやね。

マジドな笑いをしつつ一つの書類を手にとる。

そこには のハイパー改造計画ver.4と書かれていた。

第2話・ズレた感情（後書き）

オリ主スペック

黒髪、長髪、後ろ縛り。

目は深紅、鷹のようなツリ目。

H e l l s i n g アーカード青年verか、ウォルター少年という感じで。

このままでは恐ろしいので、細めの眼鏡をかけてインテリっぽくなっています。

普通に見れば美青年です。

眼鏡を掛けると目が黒く見える不思議…

体は鷺羽特製ナノマシンで麁呼以上の回復力。

つまり…不老長寿？

鷺羽が出来る事は基本彼も出来ます。

スタイルは…暗躍系

つまりウォルターみたいな糸でバツツンバツツン裂いて、Gガンシユバルツのゲルマン忍法使って、柾木遙照樹雷みたいな武術家…。三人を割つて強化した感じです。

ちなみに2012年12月22日時点で皇家の樹のバックアップ無しで光鷺翼六枚発現させています。
不吉な日ですね…。

まあ、その辺の能力はこの話で制限された事になつてます。
また、今の訪希深はうつかりさんなので予定どおりとずれた事をします。

そして、連れて行くという表現ですが実際はアストラル投射しています。

次でプロローグ終わらせる予定です。

第3話・もう一つの契約（前書き）

この後の展開を考えていいくと難しいです。
これでプロローグは終わります。

第3話・もう一つの契約

「…」

その場所は、得体の知れない植物が辺り一面に茂っている。少し歩みを進めると、どこか懐かしい雰囲気の漂う巨木が佇んでいた。

高さにして約100メートル、幅約6メートル。

彼はこの樹を知っている。でも知らない。

そんな樹。

幹の前で止まる。そして樹に触れる。

流れ込んでくる流れ込んでくる流れ込んでくる流れ込んでくる
ナニカが流れ込んでくる。

目眩がする。

頭が割れそうだ。

落ちる。

落下する。

「ああ…アンタの言つとおりになつたよ。」

誰に話しかけているのだろうか？

彼は闇の中を落ち続けているだけなのに。

「アンタの契約…たつた一つの契約…あんな簡単な契約がこんな結

果になるなんて…

本当に地獄になつた。」

彼の目には零れんばかりの涙があふれている。

「なあ、まだ終わらないのか？まだ終わらせてくれないのか？」

返事は帰つてこない。

「まだなのか…」

ナニカに納得し目をつむる。

それと同時に彼は氣を失った。

第3話・もう一つの契約（後書き）

はいっ！

意味不明ですね！

許してください…

あと、タイトルが3rd storyになっていますが、武の三回
目のループという意味ではありませんのであしからず。
本編行きます。

第1話・五摠家に産まれし鬼（前書き）

パトレイバーキャラが入ります。
また、これはフィクションです。

登場するキャラクターは実在する人物とは関係ありません。
歴史も都合の良いように改変されていますので、注意してください。

9/19 第1話：五摠家に産まれし鬼 で一貴の年齢に誤りがあ
つたので訂正。

誤：私の名前は天木一貴。アマキ カズキ 歳は3歳。

正：私の名前は天木一貴。アマキ カズキ 歳は2歳。

読みやすいように文章を改良。
11/11

第1話・五摂家に産まれし鬼

田が覚めたら誰かと話していた。話の内容は覚えていない。でも、とても悔しくて…そんな感情だけはぼんやりと覚えている。そして最後にこう言つたのだ。

「…に会つて真に…める。…方が…しい。」

よく見る夢の一つだ。

私は、曙計画の合同先行調査報告書を会社のオフィスで読んでいる。その枚数、約1000枚。しかも、両面刷りだ。
これを見たとき、辞書かと思つてしまつたが、我が日本国が戦術機を造るために必要な道筋。

よつて、こめかみを抑えつつも読んでいく。
ざっと読んだ限り、このような内容だった。

『F - 4の基本性能は対BETAには有効であると判断出来る。

しかし、我が国の資源保有量は依然低く、十分な弾薬の補給は困難であり、米国の戦術は日本のそれには適合しかねる。

故に日本独自の機動性、近接戦闘に特化した戦術機の開発が急務である。』

…なんというかやる気を無くす内容だった。

そんな当たり前の報告をする暇があるなら米国の戦術機の情報を一

つでも多く盗んで来て欲しい。

なんのために研究費用を投資したのかわからない。

私の名前は天木一貴。アマキ カズキ 年齢は2歳。

天木という苗字はあまり好きではない。

なんかこう、前世では相性が悪かったのではないかと言つた類だ。

それにこれは本名ではない。

元々、私は崇宰家で生まれた人間だ。

崇宰家は、五摂家の一角で格式高い名家であり、日本を統治している家系と言つても過言ではない。

では、なぜそんな家から出て天木を名乗るのか。

そんな疑問は簡単に解決される。

私の眼を見たまえ。

深紅に染まっている。

これが一番の問題なのだ。

そして困ったことに私は洋風の顔立ちをしていて、犬歯が普通の人

間より尖つており、かつ生まれながらにして日本語がきちんと話せ、書けた。

実の母親と私はすぐさま遺伝子検査。
結果は白。純日本人だった。

しかし、五摶家の一つ、崇宰家に「鬼」が産まれたとなつてはこの戦時下問題らしい。

そうゆう訳で崇宰家の“元”家臣であった天木家にお世話になるととなつた。

私が言える事ではないが、この天木家、私を養子として引き受けた“変態”である。

現天木家当主、天木重三郎^{アマキ ジュウザブロウ}、この人がその元凶。

彼は元帝国斯衛軍少将。

現在は天木重工業、天木商会の代表取締役、兼、社長。

現役時代、国内外問わず「斯衛軍一のキレ者にしてクセ者」と言われていた。

事の発端は習志野俘虜収容所での捕虜の扱いである。

当時の軍関係者などの反対を押し切り、故西郷寅太郎大佐を強力に支援しドイツ人捕虜を手厚く保護した。

噂では、この行為にヴィルヘルム2世はいたく感動し、亡命中であつたのにも係わらず非公式ながらプール・ル・メリット勲章を贈つたとされている。（後の平和章の原案とされる事になる）

これが元でフリードリヒ・ハックらを中心としたグループと深い親

交を持ち、天木重工業、天木商会の前身ドイツ科学研究所を設立。この研究所を通じ日本の近代化に大きく後押しした。

余談ではあるが、ドイツ国内では「日本＝重三郎」という図式が一般に認知されており慕われている。

さらに、彼のこういった功績は皇帝陛下、煌武院家等のいく僅かな有力者には高く評価されている。

第一次世界大戦ではドイツとの交渉窓口は彼であり、航空機や小火器などの兵器は彼の長男を筆頭として日本に還元していた。しかし米国の原爆に巻き込まれ長男は死亡。

こういった理由からかドイツ軍人・研究者らの亡命を強力に手引きしたとされている。

敗戦後は、病弱だった彼の三男がその商才でもって会社を大きくした。

彼は獨国とのパイプを生かし小火器、弾薬を中心開発、販売。世界シェア10%を越えるという快挙を成し遂げ、日本国内では40%は優に越える日本兵器産業の草分け的存在となつた。

また長男の死亡、次男はミッドウェー海戦で死亡していたため、彼、^{アマキ}_{コウジ}天木祐司が天木家当主となり、慣例として斯衛軍に技術将校として入隊した。

ただ、1968年には肺結核を患い死亡している。

又3人は妻を貰っていたものの子に恵まれず跡取りは誰一人いなかつた。

故に重三郎が当主に戻り、会社の経営をしているのである。

彼は77歳といつ高齢であるため、子を得る為にはいたとか無理がある。

それにて言つながら彼の妻もすでに世に面りず、彼自身も新たな嫁を貰うつもりが無い。

なぜなら、彼は多くの武家に嫌われているからである。

武家というのは商いをしてはならぬこという仕来りが存在してあり、またドイツとの親密さからナチスのシンパ、若しくはドイツのスペイという噂が絶えず幕末家からも敬遠されている。彼は退役しているとはいへ「赤」を司る斯衛である。

これは武家社会において、かなりの高い地位を表す。

頂点を「紫」、「青」、「赤」、「黄」、「白」、「黒」とし、赤は3番目にあたる。

それ故に、世間からの風当たりも強い。自分の苦労を子にかける必要は無いし、会社も別の人物に任せればいいといつ考えをしてた。

「いや、私の存在である。

産まれながらにして鬼とされ、存在を消されようとしていたときこそ、

彼は私を引き取った。

あれから2年しかたっていないが、今でも覚えている。

彼は私にこつ言つた。

「修羅の道を歩む心意氣はあるかの？」

まったく、この”じじい”は0歳の餓鬼にとんでもないこと聞いて来やがつた。

普通、0歳の餓鬼にはそんなことを聞くはず無い。

つまり、彼は私の”異常性”を認め、それを肯定した上でこの質問だ。

私は、私の自身の運命を切り開く事を決意し「是」と答えた。

本当のところ、母親や父親に止めて欲しかつたが、それはなかつた。そして、武術に始まり経営学やらなんやら様々な知識を与えられた。お陰で今や、じじいのバックに付き、事実上会社の運営は私がやっている。

そして一つの計画を練つてしているのだが…

「入るぞ、坊主。」

「ノックしてから入室してくださいよ…」

物思いに耽つていた私は突然の来訪に驚きもせず、眼鏡を外しながら振り返る。

この男は、榎 清太郎、帝国陸軍技術軍曹。

天木重工業の技術部出身。

亡き祐司さんの親友であり、一般人で唯一、彼にタメ口で話していた男だ。

戦術機が発表された後「こいつあ男のロマンだ」と訳のわからないことを口走り、天木重工業、部長のポストを蹴って帝国陸軍技術廠へ行つた猛者でもある。

昔のよしみどこり」とで、今回、軍から我が社に出向してもらい、曙計画に行つてもうつた。

「ん。」

500枚程度のまとめられた書類をぶつきらぼうに渡す。
それを私が受け取ると、自分専用のマグカップに珈琲を入れてソファーに座り込む。

表紙には”極秘””部外秘””転記禁止”などと真っ赤に染まっている。

題は「戦術機の管制ユニット及びシステムのリバースエンジニアリング報告」。

先ほどの合同先行調査報告書とは違い、数枚めくるだけでもこの報告書の濃さが伝わってくる。

ため息をしつつ書類を閉じ机に置く。

これは直ぐに読めるような内容ではない。

「流石ですね、おじさん。」

「あのな、坊主。

俺は仕事でそれをやつてているんだ。

それにお前さんに流石だなんて言われる筋合ひは無い。

俺にとつちや当然の内容だ。」

だから他の連中が出来てないから……と言おうと思つたが私はまだ2歳。

こんな餓鬼に褒められるのは屈辱であるつ。

「わかりました。お仕事!」苦勞様でした。」

「それでいいんだよ。

俺は技術部に戻つてそいつの内容説明していくわ。」

彼はそのまま膝を強く叩き、立ち上がる。
んじやあな、ヒドアノブに手をかけつつ背を向けながら片手をあげて退室する。

そして、私は眼鏡をかけ直し書類に手を出すのであった。

第1話・五摠家に産まれし鬼（後書き）

天木一貴

天地無用！の世界での名前とは関係ありません。
あと、彼は記憶を失っています。

パトレイバーのおやつさん！
いいですよ～

それでは

第2話・Phantom（前書き）

アウター・ガンダムの設定が入ります。

松浦まさふみさんの描く女性キャラが個人的にツボです。

9/19 第1話：五摺家に産まれし鬼 で一貴の年齢に誤りがあ
つたので訂正。

誤：私の名前は天木一貴。アマキ カズキ 歳は3歳。

正：私の名前は天木一貴。アマキ カズキ 歳は2歳。

このBETAとの戦争、人類の敗北はもはや免れない状況となつて いる。

パレオロゴス作戦によるミニンスクハイブ攻略失敗。

それによるスルグートハイブの建設。

BETAの攻撃はもはや留まるとこりを知らない。

いや、もしかするとこれは戦争では無いのかも知れない。

そもそも戦争とは国家の間で行われる血を血で洗う争いだ。

我々人類は、彼奴等から未だに宣戦布告を受けていない。

ということは、彼らは我々を敵と見なしていないのではないだろうか？

とある研究者がBETAの生態をアリに例えて話をしているが、疑問点がある。

彼らは”防御”しないのだ。

あらゆる場面において”侵攻”するか”攻撃を受ける”この2点だけである。

ということは守るべきものがないのではないか？

アリならば女王アリや卵を守る…まあ例え話に噛み付くのもあれだが…。

つまり、母なる存在がそこには無く、一つの機械として作業しているのではないか。

そして同じ炭素系生物である人類もまた機械として認識されていると仮定する。

ともすると、彼らは一体なんの作業をしているのだろう？

彼らは一つ一つの星を隅々まで”占領”する。まるで掃除をするように。

いや、隅々まで何かを探しているのか…。

それを確かめる術はまだ無い。

あれから3年、榊からもたらされた情報は、天木重工業の手によつてその体を成そうとしている。

「完全自立型無人機システム実証試験機（案）」
またの名を「Nephyr Phantom System」という。

純粹に、B E T A を殺すためだけのものだ。

これは一貴と内海が戦術機を無人で大量投入するために考案し、実験しているシステムである。

内海とは天木重工業、戦術機課課長。

といつても神出鬼没な人間で実際の所、黒崎という部下が実質的に課を動かしているようで、課長らしいことは何もしていない。

一貴は「給料分は働いている」ということで今のところは放置しているようだ。

一貴は生まれながらにして持っている知能でもつて、天木グループの利益を上げ続けている。

例えば認知心理学を使用した深層心理療法を生み出し、応用として戦術機パイロットの精神安定・高揚に寄与している。

一種の催眠・洗脳であるが、これによりB E T A の殺傷率が上がつてあり、パイロットの生存率も上がっているのも事実だ。

他にも日本の軍事組織向けに衛士強化装備の開発・生産。

そりには管制ゴーラーのライセンス生産も行っている。

その延長上にあるのがこのゼファーである。

この戦争は人が行う必要はないという考え方の元、出来たシステムである。

「一貴や。」の者が強力してくれるそつじゅ。

重三郎が一人のブロンドヘアの老人を連れて来た。

「初めまして、カズキ様。」

そう言って右手を差し出し、自己紹介を始める。

何とも、怪しい雰囲気の漂う彼の名はヴァレリアン・トリファとい

う。彼は重三郎が助けたナチストの一人らしく、恩返しの一つとして来日したらしい。

一貴は、様はよしてくれ、と彼に言つたが受け付けてくれない。そのまま一貴は握手を受け、手早く自己紹介をした後問い合わせる。

「トリファ殿、今回の件は難しい事ですがそれでも？」

しかもじじい…もとい、重三郎の恩と言つても私には関係ありません。

せん。」

「ええ、構いません。

我々の教義には友を愛せよ、とありますから。貴方も例外ではありません。

大方、重三郎様からお話を伺っていますが、要は秘密裏にゼファーとやらの実戦試験を行いたい、という事ですね？

それと、殿は結構ですよ。」

なぜゼファーを公開試験しないのか。

ゼファー・システムは人間が乗らない戦術機の為、G制限がかからない。

シユミレーション、つまりは架空空間での戦闘で改造型F-4に乗つたゼファーはとんでもない戦果をたたき出している。

対BETA戦シユミレーションで地上支援無し、補給状態30%、BETA出現率100%で、ヴォールクデータをやらせたところ、ハイブ内を”単機で深度約100m”侵攻した。

このデータは開発陣を驚かせ、一貴主催で盛大な宴を施設内で行った。

誰もが人類の勝利を確信した瞬間だった。

その中で内海が酔った勢いでゼファーをMig-21と戦わせた。F-4に乗つたゼファーと日本の仮想敵国機Mig-21とのキルレシオ。

その数値0:955

これは、まだ見ぬ第3世代戦術機以上の戦闘能力である。
会場は騒然。

「戦争をさせてみましよう」という内海の提案で、試しに集団戦を行わせてみたところ、敵と味方の区別が出来ておらず動くモノ全てを破壊してしまった。

BETAより酷い、この結果を見た会場は一気に通夜と化してしまった。

その後、改良してみたところ、一様はIFFを認識しているようだが”高脅威目標”を殲滅するために味方を犠牲にする箇所が見受けられ危険過ぎるのである。

また、それに伴い単機でのハイブ侵入も困難になってしまった。とは言つても、無人で戦闘参加できる事のメリットは高く、少しでもBETAの侵攻を押さえる為にはいち早くバトルブルーフしなければならない。

ちなみに、一貴の侵入深度はゼファーと同条件で約20m。そもそも、単機で侵入できる彼も彼で規格外だが…

閑話休題、一貴はトリファの言つ教義、といつ言葉に少々疑問を持ちつつも話を続ける。

「では、トリファさんと。

どうやって手伝つていただけるのですか？

このゼファーは非常にアリケートな兵器なモノで、理想的な演習場所は…。

そう、戦術機がないBETAだけの場所ですね。そんな場所に送り届けて頂きたいのです。」

まあ無理でしようが、と彼は内心思いつつ言った。

「…危険ですね。

ただ、結論から申し上げますとバルト海までなら送り届けられます。」

「もしや…あれを？」

重三郎が初めて口を開く。

「はい、潜水艦を使います。

U-boot XI型を3隻までなら用意できます。」

「貴方は正氣か？」

大戦中の兵器ですよ！？」

それに人員は何処から手配するのですか！？」

一貴が声を荒げながら問う。

「人員は私が集めます。

この潜水艦は我々が亡命した時に使用した船ですから。

U - b o o t X I X 型と言いましたが外見、内部もその時とは全く異なり、緊急用の輸送船です。

ですがご安心ください。

性能、速力や静肅性どれをとっても従来のそれを上回ります。

それと、私は正氣です。

どちらかというと、貴方の正氣を疑いますが？」

これには言い返せない。

そもそも無理を言ったのは一貴なのだから。

だが、妙な話である。

トリファアの言う事が本当ならば、亡命したナチスは膨大な資金力と技術力を未だ保持している事となる。

しかも、今回使われる船は緊急用、通常はどんな船を使っているのだ？

…ある噂を聞いたことがある。

ナチスドイツは魔術を使っていた。

ヒトラーは魔術師に操られていたに過ぎず、黒幕は別にいる。

そして、その魔術師がB E T Aを呼んだと。

まさか、彼らがそれなのかな？

トリファの目は真っ直ぐ一貴をとらえている。

一貴は咳払いをしつつ眼鏡の位置を戻す。

「失礼。

では、見返りは何を？」

それを聞いたトリファは拍子抜けした顔をし、頬を引きついあげ突然笑い出した。

「ははっ！失礼。

流石は天木家のお方だ。

私は初めに重三郎様の恩に報いる為と申し上げたが、無償と解釈しなかつたか。

結構、結構。素晴らしい。

あの時を思い出しますよ、重三郎様。」

そう心底楽しそうに重三郎に同意を求める。

そして、私の”息子”だからな、と答えていた。

「では、一貴様、一つだけお願ひ事を。

私の命はもうすぐついえる事でしょう。

そこで、私の息子ヴァレリア・トリファが困った時、助けてはくられませんか？」

「わかりました。その時は全身全霊を持ってお助けいたしましょう。

」

言い終わつたと同時に双方ソファから立ち上がり力強く手を握り合つた。

第2話・Phantom（後書き）

U-boot XI X型

UボートXI V型の後継艦で補給用潜水艦で、リアルだと完成してなかつた筈です。

マップラヴの世界ではナチス・ドイツ最強だったようなので、完成。彼らが乗る船は、もはや大戦中のモノではありません。

全長：99.3メートル

全幅：10.2メートル

浮上航行時：15.8ノット

潜航時：30ノット

主機：???

排水量：???

改造型F-4

F-4にしてF-4にあらず。

外見は統一中華戦線J-8殲撃8型です。

内部は”より人間に近い機動”が可能なように改良されています。つまり、従来の戦術機に搭載されている、カーボニック・アクチュエーター電磁伸縮炭素帶ではなく、電磁収縮筋（通電により伸縮する形状記憶プラスチック）を使用しています。

電磁収縮筋は内海さん考案で、榎班長も整備出来ます。

管制ユニットも独自設計で、脱出機能はありません。

基本OSは内海さんだけあって”ASURA”改ですが、一貴がつくれてます。

なんだか話が見えてきちゃいましたね。
トリファさん、クサ過ぎですよね。

それでは

第3話・遺憾の意（前書き）

一貴が壊れます。

ヒーリングのキャラクターができます。

今何が悪い……？

第3話・遺憾の意

「「」きげんよう、天木様」

「「」きげんよう…」

なんで俺が…小学校にはいらねえといけねーんだよっ!!!!
と内心叫びながら、学校の昇降口の前で怒りの舞をしているのが、
天木一貴その人である。

この学校は、斯衛関係者が入学する初等科であり、名門中の名門と
されている。

まず、マナーの講座から始まり、茶道、華道、武道…あらゆる道を
たたき込まれる。

しかし、彼には関係ない。

もうすでに、大人の世界に踏み込んだ一人のビジネスマンであり、
重三郎に指南を直接受けた天木家の次期当主である。
実際、義務教育と言つても「一身上の都合」から通信制教育に移行
できるのがこの学校である。

それをしなかつたのは、じじいこと重三郎のせいである。

「この始まりは1年前のF-4、「Nephyr Phantom System」の試験結果だ。

「良い結果が出ぬ場合はお前を小学校へ行かす。」

「良い結果が出た場合、おじこさまには隠居して頂きましょうか。」

潜水艦内で一人の視線に火花が散る。

その様子を見ていた潜水艦内の兵士達はため息をつきつつ、試験地の情報を集め、自らの職務を全うしていた。

兵士…。

そう、彼らの姿は兵士そのものだった。

ナチス・ドイツ時代の海軍の制服。

タンカーを使って、沖ノ鳥島の南西50km先で彼らと会流したが本当に異様だった。

我々の出迎えには全員正装をし、右手を上に上げる独特的の敬礼をしてきた。

「Achtung!」

「「「Siegen Heil!」」」

いつの間にかSS（親衛隊）の制服を着込んだトリファアが短く返礼をし内部に入る。

艦の運航は大尉の階級をした者が行い、一人一人の業務が階級によつて決められている。

軍隊そのものだ。

一体全体こいつらは…。

「周囲に敵影無し。」

「よし、アップトライム15度、無音浮上。僚艦にも伝える。」

浮上と同時に甲板要員緊急配置。ハッチを開き輸送ヘリ発進。「

「Jawohl! Herr Kalen...」

目的地についたようでヒュンが慌ただしくなる。

ヘリだと光線級にやられると思うのだが、大丈夫らしい：

ゼファーの装備は青龍偃月刀、三国志の武将、関羽が使用していたと言われる通称青龍刀。

その形を模した、高周波ブレード。

そしてA-97突撃砲を2丁装備している。

一貴達は潜水艦に設けられたゼファー専用のコントロールルームで試験場所に着くまで待機する。

すると無線が入りゼファーを”投下”したと連絡が入った。彼らの番である。

「全システム解放。アーマープロテクト解除。
システムオールグリーンです。」

「さあ、やつてくれ。

起動!ゼファーファントム!」

リトニアに1機だけ降りた戦術機のメインモニターが赤く光り立ち上がる。

装備していた青龍刀を片手で回転させながら構える。

その先には黒い津波と化したBETAが此方へ向かってきていた。

恐れもせず、臆することもなく、ゼファーは彼奴等を切り裂いて行く。

その姿はまるで黄泉の国から舞い降りた閻雲長その人に見えた。

ゼファーーの通る道はBETAの屍が、つづたかく築かれしていく。光線級が視界に入れば他のBETAを盾にして接近、殲滅。要塞級に出会えれば刺身にしてしまう。

戦闘開始から僅か10分、無傷で戦い続けているゼファーー。もはや、コンバットブルーフには十分な戦果を挙げ、一貴の勝利は間近だった。

重三郎の本心は”子供”に十分な青春を送つて欲しいという親心から來たもので、戯れにあのような賭け事をしたわけではない。そして、本人はそんな”親心”を理解できるほど”大人”ではない。しかし、一貴は最初こそ意氣揚々としていたものの徐々に顔色が悪くなる。

現状、冷静になつて戦況を理解しているのは重三郎と彼のみだ。

「ゼファーーを回収する。私の機体を出すぞ！」

一人の技術者が満面の笑みでそれを制する。

「坊ちゃんが行くほどの事ではありませんよ。
ゼファーーが片付けて簡単に帰つてこれますよ。」

BETAへのキルスコアは優に”5万体”を越えており間接部分が焼け落ちるまでに猶予が無い。

「全員目を覚ませっ！！

BETAの数が多すぎる！5分間で5万体…ウォールク・データの3倍だぞ！」

どう考へても異常だ！」

すでに発進準備が完了していたヘリに乗り込み、ゼファーの回収地点に急行した。

そこは、異常な光景だった。

ゼファーに群がるBETA。

ヘリや一貴が近づいても殆どが反応しない。

ゼファーのみに攻撃しているのである。

パイロットは破顔しつつもHQを呼び出す。

「HQ、JALIAゼファー回収班、over」。

「ゼファー回収班、JALIA HQ over」。

「HQ、JALIAゼファー回収班。

break・予想よりBETAが多い。いや、多すぎる。

ポイント以外を焼き払ってくれ。break over」。

「ゼファー回収班、JALIA HQ 了解。15分待て。out」。

15分後、回収支援の為に潜水艦からトマホーク（RGM/UGM-109D TLAM-D）が全弾発射され、周囲はクラスター爆弾により一時的にクリアになつた。

それと同時に一貴は戦術機と共にヘリから降り、ゼファーの回収を開始した。

だが、BETAの攻撃はやまない。

3分も経たない内にあたりはBETAで埋め尽くされる。

一貴もそれに負けず劣らず彼奴等をさばいて行く。

まるで時が止まっているかのよう。

「クロノス1、こちら回収班。

」のままでは回収不能。対象の破棄を提案する。」

一貴のコールサインは決まっていなかつたが、どうやらそれがそつらしい。

ヘリは上空をホバリングし続けている。

「回収班、こちらクロノス1。

却下する。もう一度トマホークで焼き払った後、5分間もたせる。回収が可能か？」

「不可能だ。せめて15分無ければ出来ない。」

「ならば、ゼファー本体の回収はどういうで出来る?」

本体。

つまりはパイロットルームのみを外し回収すると云ふことである。しばしの沈黙の後通信がくる。

「こちら、回収班。

クロノス1の機体を回収しない場合、それを含めて5分で完了する。」

「クロノス1、了解。それで構わない。」

「flash_flash_flash - こちら、HQ・A11
commander.

状況は把握している。」のままであれば海岸沿いの回収が望まし

い。

座標 AD - 3523 繰り返す、Alpha - Delta - 352
3を回収地点としたい。

20分後トマホークを発射する。thank you out.

「HQ、いらすら回収班、了解。out.」

「HQ、いらすらクロノス1、了解。

管制班、ゼファーの誘導頼む。break over.」

「いらすら管制班、了解。out.」

結果的にはゼファーを回収する事が出来た。
しかし、残念なことに改造型F-4を2機放棄する事となってしまった。
だが、一番の問題はゼファーを実戦で使用する事が出来ない、
ということである。

先の作戦で海岸沿いまで後退し、ゼファーのコックピットを一貴が
引き出した。
するとBETAは一貴のみを狙つよくなり回収だの話では無
くなってしまったのだ。
結局、ゼファーの内部電力を破壊する事によってBETAの発生数
を減らし事なきを得た。

「Nephys Phantom System」の試験結果は以

下の通りとなつた。

- 1、対BETA戦における戦闘能力は、非常に強力である。
- 2、対人戦における戦闘能力も、非常に強力である。
- 3、しかし、いずれの場合においても、戦術機自体のトータルスペックがシステムに追いついていないのが現状である。
- 4、対BETA戦において、何らかの理由によりBETAを誘引している。

以上から戦闘能力に疑いの余地を挟む所はない。

しかしながら、現在の戦術機のスペックでは対BETA戦において有効な戦略立案が出来ない。

また、BETAを誘引する理由が解明されない限り、他の部隊を危険にさらす事となる。

よつて当該システムは、実戦において使用することが著しく困難だと判断される。

このような判断があつたため、ゼファーは修理を終えた後、改良型F-4に換装され厳重管理のもと動態保存となつてしまつた。

と、思い出した一貴の怒りは激しさを増し、もはや能のよつな動きと化している。

地団駄を踏んでいるようなその足は一定のリズムを刻み、まるで何かを呼び出すかのような…

「貴様が天木一貴だな！」

「びしつ！…」と擬音がする勢いで指を指す、凛とした女性が一人彼の前に立ちはだかった。

先頭の女性は鬼の形相で睨めつけ、もう一人は眼鏡を掛け、後ろに佇んでいる。

「何か用かつ！今日は八日かつ！！
俺は今忙しいのだ！！」

主に怒りの表現で…

「私は五摠家の方々をお守りする赤を授かりし、月詠真那！」

「同じく姉の月詠真耶」

堂々と名を挙げる両者。
だが、彼は意に介さない。

「マナだか、カナだかしらねえが、俺は忙しいっていつてんだろ？
があああ！」

一貴は自分でも何を言つているのか解つていらない。
寝る間も惜しんで開発したゼファーが、使えないと言われたショックと、重三郎のかけに負けた悔しさをどのように発散するか考えて
いる最中なのである。

しかし、真那と真耶もそんな彼の心情を意に介さず、一つの赤い字
で書かれた封書を目の前に出し宣言する。

「「貴様に決闘を申し込む……！」」

そんな状態を見ていた野次馬達は一瞬凍り付く。

「はああああ？？？？」

「馬鹿か！？このジャリー！」

「この俺に果たし状を送るなんざ10年早いわ！－！
その貧相なミーマムおっぱいがあの丘を越えるまで、出直してこ
いつ－！」

「話はそれからだ－－！」

そして、彼の発言を聞いた真那は顔を真っ赤にして反論する。

「なにがミーマムおっぱいじゃあ－この白人野郎－－！
ヤンキー魂見せてみろってんだ－－！
しかも、てめえもジャリだらうが－－この餓鬼つ－－！」

「んだと、このアマア－－！」

俺は白人じやねえ！体質なんだよ、阿呆－
嘆きの壁のおっぱいがしゃべるんじやねえよ－－！」

「おつぱことおつぱこと－－」の下衆め－－！」

「はあ～おつぱいの素晴らしさが解らんとまな－
はつ－お前は一生おぼいだ－－！」

「なつなんだと－－！」

「や～－や～－こ、お・ぼ・ー－！」

双方共に顔面が付きそくながら、ガンを飛ばしている。
ため息をつきつつ真耶が間に入る。

「天木一貴。我らの果たし状、確かに渡したからな。」

「ちよつと真耶…と真那は抗議しているがするすると、張つていぐ。

行き場のない怒りを抱えながら、一貴は果たし状を受け取りその場を後にするのであった。

第3話・遺憾の意（後書き）

マナさんブチ切れですね。

以降マナ、マヤはカタカナ表記にします。

なんで果たし状??次回にその説明をします。

青龍刀…薙刀にしようかと迷いましたがノ・8なんで。

なぜ殲撃8型なのか、それはラウンドモニターがカツコイイから…！
それだけの理由です。

他の機体は銃を撃ちますって感じで、あまり好きじゃありません。

また、日本刀よりも槍の方が強いと思いますし…。

これは筆者の思い込みです。

ヘリはナチスの新兵器で一貴達もその構造について理解していません。

中型ヘリで戦術機1機乗せられるスペースがあります。

それ以上は不明です。

筆者は美乳が好きです。

それでは

第4話・養父の気持ち（前書き）

早めの更新です。

養父と書いてオヤジと読みます。

今回はじじい中心です。

それでまたね。

第4話・養父の気持ち

校門をくぐると黒塗りのセダンが6台止まつており、周囲には強面の人間が立ち周辺を警戒している。

一貴を見つけると同時に彼を囲み車まで先導する。

「一貴様、お帰りなさいませ。」

と初老の男性がドアを開け頭を下げる。

「い）苦勞。」

そう言つて車内に入り車が発進する。

ふつつ…とため息を付き隣を見ると重三郎がいた。

「げつ…じ…」

「じ？」

「ほつほつほ。学校にいるお主にビツび見えるのじや？
それよりも、いつもより車が多いことに気づかなかつたのかの？」

それは…失念していた。

果たし状の事ばかり考えていたのだ。

なぜなら、一貴は初等科に入って初めて私的な会話を果たしたのが月詠マナ、力ナだつたから。

入学当初からあらゆる科目でトップクラスだったこと、五摂家の一部は彼の正体を知っている事、肌が白く歐米風の顔立ちをしている事…等々が災いして、彼の周りに同世代で話しかけてくる子など皆無だった。

しかも、”あの”重三郎の御曹司ともなれば風当たりも強い。

正直に言つてどんな形であれ、話しかけてくれた事に彼は嬉しく感じていた。

「いえ…その…」

と、もじもじと手に持つて居る封書を隠そうとする。だが、重三郎は知っていた。

「ほつほつ。果たし状か。儂もよくやられたもんじや。」

「はー?」

なんで知っているんだと言わんばかりの顔で重三郎を見る。

「どれ。見せてみよ。」

一貴が惚けている間に手元から封書を奪つてしまつ。手をバタバタさせて奪い返そうとするが身体の差でとれない。

「なになに。」

『我が家、月詠家は代々五摂家を守護する家系なり。

天木一貴殿は紅蓮中将に認められ、次期煌武院家当主の護衛の推薦を受けていると聞いた。

一貴殿は天木重三郎様の実子ではないと聞く。

そのような者が五摶家を守護することはまかり成らん。

我ら、月詠マヤ、マナは貴殿のよつな得体の知れぬ者に護衛が務まるとは考えられぬ。

故に、貴殿に決闘を申し込む。

明日の放課後、道場にて待つ。』

…とんだ因縁をつけられたものじやの。』

それを聞いた一貴は舌打ちをし、ぼそぼそと何かを言い出した。

「あの糞アマあ…俺は別に護衛などやりたくないわ!」

「ほつ！？なんか言つたかの？」

「い、いえ。別に…」

二タニタと笑いながら一貴を見る重三郎も内心喜んでいた。

彼の現状を知つていたし、何よりも心配だった。

普段自分の感情を押し殺して過ごしていた一貴は誰に対しても敬語だった。

それが崩れた喋り方をしてくる。

本当に嬉しかった。

「お主はどうするつもりかの？」

お主の実力ならば簡単に勝てるじゃろ？」

「まあ、でも…」

そういうしている内に家に着く。

一貴はぶつぶつと言いながら家に入つて行く。

重三郎はそのまま紅蓮 醒三郎のもとへ車を走らせた。

紅蓮 醒三郎。

無現鬼道流の師範代で帝国斯衛軍中将の階級を司る者である。次期斯衛軍大将とも言われており優秀な人間である。武術においても人並み外れた能力を持ち合させた人物だ。しかし、武術の点で言えば重三郎に勝つた事はない。

樹雷式武術。

天木家のみに伝わる武術であり、この世で扱えるのは重三郎と一貴、二人しかいない。

一貴と紅蓮は二度手合させをしているが、その内二戦は引き分け、一戦は一貴の負けという結果である。年齢を鑑みるにそれだけでも一貴の異常さが理解できるだろう。ちなみに、紅蓮は重三郎以外には負けたことがない。

紅蓮宅に車が着くと軍服姿の醒三郎が出迎えた。

「お久しごりです、重三郎様」

「うむ、久しいの、息災か？」

「御陰様でござります。そちらもお元気そうで何よりです。ここではあれなので、どうぞ中へ」

門を通され客間へと移る。

「して、今日せざつにいたい用件で。」

そう、急な来訪で紅蓮も驚いていた。

普段の重三郎なら3日前には連絡が来る。

それが今回は険しい声色で電話がかかってきた。

当の本人は気が気ではない。

「うむ……その事なんだが……」

「ゴクリ……紅蓮は汗を垂らしながら言葉を待つ。

「家の一貴に……果たし状が届いてしまったのじや……。儂はもづ、心配で心配で。

もし怪我をしてしまったらいづしじよつとか、相手を殺してしまつたりどづ処理しようか……

もづ…どうすればいいのか解らん……」

紅蓮は後ろにひっくり返っていた。

「まつ…どづしたのじや？」

「あ、いえ……」

心配して損した、という顔をじつ話続ける。

「誰からの果たし状なのですか？」

「それが、月詠の娘子のようなんじや。せじんじてまた？」

「は？ どづしてまた？」

「ほお～知らんと申すか。」

目を細くし、ドスのきいた声で紅蓮を睨む。
紅蓮は冷や汗をかき、しかし、冷静に考える。
だが思い当たる節がない。

紅蓮は首を横に振つて答える。

「そうか。

主は儂の息子を次期煌武院家当主の護衛に推薦していくと聞いた
が？」

「それは…現当主との酒の席の話で良い男がいる、といつ話をした
までです。」

と、否定的な立場を示した。

どうやら食い違いがあつたらしく。
すると紅蓮はハツつとした顔となり恐る恐る問いつめた。

「まあか、月詠はそれで…」

「そのよじりやの。」

「も、申し訳あつません…！」

真っ青な顔になつた紅蓮は土下座を決め込んだ。

勘違いをした張本人ではないものの、この事態を招いた事の一因は
自分にあつたと思つたらしい。

だが哀れな紅蓮、重三郎の思惑通りとなつてしまつた。
目が光つてゐる。

「うーん。まあ許さんでもない。
ただ、とある約束をして貰いたい。」

土下座をしている紅蓮からは彼の顔は見えない。

「して、約束とは？」

「つむ。

一貴はとても大事な子じや。

それは儂にとつても、五摠家にとつても、日本にとつても。
だから、紅蓮。

息子が、本当の息子になつた時、支えてやつてくれんかの。
あの子には敵が多すぎる。
すまん。このとおりじや。」

重三郎も土下座をした。

紅蓮は何も知らない。彼の素性、経歴を。
彼の言つている意味はわからない。

だが、その雰囲気は有無を言わせない迫力に満ちていた。

「重三郎様！おやめください。」

当然慌てふためく。

「いや、没落して貰つまでは上げられん。」

「お受けしますのでどうかお上ばへださー。」

その言葉を聞いた重三郎は安心した面持ちで顔を上げた。

「よろしく頼む。紅蓮。」

「まつ、御意に。」

「よしつー。」

今日は儂が酒をおいひつー。

行くぞ紅蓮！

先ほどの雰囲氣とは打って変わつて朗らかな調子で紅蓮を誘つ。

「まだ5時ですよー。」

それに決闘はどうするのですか？

「いいんぢゃー！その件は一貴がどうつかるのでー。
行くぞーー！」

と無理矢理彼を引っ張つていく。

紅蓮はまだ知らない。

これが紅蓮と重三郎の最後の会話となることを…

第4話・養父の気持ち（後書き）

じじい＝クソババアです。

瀬戸の再来のつもりで書いているのですが味が出ませんね…

樹雷式武術、なんでマブラヴの世界に…?

強いです、めっちゃ強いです。

だって宇宙一ですから。

下手したらBETA切れます。

マジで。

それでは。

第5話・修羅の道（前書き）

ママヒマナのキャラが難しいですね…

第5話・修羅の道

放課後の道場。

そこには腕組みをし、人差し指をイライラしながら動かしているマナと、ジッと時計を見つめているマヤがいた。

彼女らがここに着き30分が経過したところでマナはキレた。

「遅い！！」

あのオカマ野郎、逃げ出したんじゃねえだろ？！

比較的冷静なマヤは震える声で諭す。

「そんな事はないだろ？…まさか、な…」

オカマ野郎…これは彼に嫉妬した人間がよく使う言葉である。
一貴の顔や肌は非常に美しい。

見るものを魅了し酔わせる不思議な力がある。
しかも、それを感じるのに男女の関係は無い。

普段、彼は眼鏡をかけておりその素顔を確認した者は誰もいない。
もし仮に、眼鏡を取つたら”とんでもない事”になるというのが定説だ。

当の本人はその事を理解していない。

いや、理解をしているが彼らの定説とは違う意味で、だ。

故に彼の周りにいる”女性”は基本的に不戦の条約を結び、彼が話しかけてこない限り接触を持たない。

そういう事情もあり男性陣には、とことん嫌われている。

そんな好き勝手な妄想をされている本人は、道場の外で様子をうかがっていた。

「はあ……、覚悟を決めようか。」

そう呟いて戸を開く。

それに気づいたマヤは戸をこれでもかと開き覗みつけた。

「貴様！――何時だと思って居る―！」

一貴はため息をするのを堪えて社交スマイルをした。

「月詠マナ、マヤさんお久しぶりです。
いや、少しばかり用があつたもので……」

「御託を並べんでも良い……始めるぞ。」

マヤは懐から真剣を取り出す。

しかし、一貴は表情を変えず一コ二コとしている。

「これはこれは、恐ろしい。」

「いえね、刀を交えずともお話をしようと思いましてね。」

「「その必要は……ないっ！――」」

2人は短刀を逆さに持ち、つま先に力を入れ同時に斬りかかる。
その太刀筋、流石は月詠家、見事なものだった。
時間差で一貴の急所を突いて来る。

目。

首。脇。手首。

心臓。腹。

金的。

ありとあらゆる場所を的確に、しかし、高速に。
常人であれば確實に100回死んでいる。

だが、彼は樹雷式武術を極めし者。

”そんな”攻撃は見切られ、紙一重の所で全て躱していく。

月詠達の息が上がり始めたところで後ろへ跳躍する。
そして、未だ笑顔を絶やさず言葉を繋げる。

「名乗りも上げず斬りかかるとは、穏やかではありませんね。
ここは穩便にお話を…」

「ば、か、なつ：
ハアハア、何故だつ…」

何故息も上がらず汗もかいていない？

そう聞きたいようだが、正直彼女らは酸欠でホワイトアウトしかかっている。

「あのですね…」

一貴は少し困ったような顔で、人差し指で頭をかく。

「私はその件については何も知らないですし、そもそも護衛なんて

興味がないのですよ。

ですから、その件は私の方から正式に辞退させて貰うつもりなのです。
ですが。」「

そう、彼には関係がない。

彼は、今は天木の姓を名乗っているが元は五摠家の一角、崇寧の出身だ。

彼にとつてはどうでも良い話で、本来は守られる側なのである。しかし、その言葉が不味かつた。

「つー貴様あ！」

赤を司る斯衛が護衛をどうでも良いだと！？

斯衛の警れを何だと心得るか！

まさかとは思つたが、貴様、外人か！？

ならばここで、死にさらせつ！！」

先の発言にはマナもキレさせた。

彼女たちにとつては斯衛の任務こそが生き甲斐であり名誉である。それを蔑ろにさせることはこの世で一番許し難いことだ。息が切れているのにも係わらず2人とも突きを入れてくる。

だが、一貴にとつても”外人”という言葉は唯一のコンプレックスであり逆鱗である。

2人の突きを交互に脇で挟み一時的に拘束する。

「ほお、外人ですか…

はははは…私は正真正銘日本人ですが何か？」

そう言うと彼の額には青筋が立ち、ドスのきいた声を出す。

「クククッ…

そう、そもそも、お前らが喧嘩を売ってきたんだよな？
ああ、そうだった。なら遠慮なんていりねえよなあ？

なあマヤ、マナ？「

彼の顔は既に穏やかなものではなく、鷹のよつな目つきに変わり、
口元は張り裂けそうな程に上がり、鋭利な犬歯が強力に自己主張し、
おぞましい笑みを浮かべている。

黒く濁んだ空気が周囲を包んでいく。

そして、彼女達の手首をつかみ上げ一気に力を込める。

うめき声を上げるマヤ、マナ。

一貴の放つ鬪氣に当たられ脚や歯、腕は小刻みに震えている。

彼女らの気力は完全に削がれ、持っていた懐刀は手から滑り落ち畳
に突き刺つた。

「そのよつな力量で私に勝負を挑もうとは、片腹痛いわ。」

そのまま彼女達を壁へと叩きつけた。

間一髪で受け身をとり辛うじて意識は保つている。

「「くづく…」「

どうしようもない者を相手にしている。

それを理解したが、時は既に遅し。

勝負を持ちかけたのはこちら側なのだ。

彼女らは、最後の力を振り絞って殴りかかったが、勝負はもう既に
ついている。

易々と避けられ、逆に腹部を強打される。

「ふん、 犬め。

所詮、 犬では私を倒せない。

だがその根性だけは認め、 生かしてやるつ。

さらばだ、 月詠マナ、 マヤ。」

その言葉を聞いて彼女達の意識は途絶えた。

「ふう……」

ため息をついて我に返る。

一貴は、 これだけの事をすればもう立ち向かってみると、 と内心思いつつ氣絶している彼女達を見る。

目立った外傷は無い。

美しい女性なのだから傷でもついたら不味いという彼なりの最大限の配慮だった。

「20分もすれば目も覚めるだらうか?」

独り言を言いつつ自分の上着を脱ぎ彼女達にかつとかけ、 道場を出た。

すると、 やはりといふか、 何といふか重三郎が佇んでいた。

「済んだかの?」

優しく語りかける。

「どうせ、最初から見ていたのでしょうか？」

その顔はあきれた表情、悲しみの表情、様々な感情が入り乱れたものだった。

今回の件でまたつまらない日常へと戻っていく。

決闘を受ける前から覚悟していたことではあるが、やはり悲しい。そして、その表情を読み取られなにより、迎えの車を待たしていの方へ歩く。

その気持ちを重三郎は知りつつも彼を呼び止める。

「次期煌武院家当主の護衛は受けれるのかの？」

歩みを止め、少しばかり考えるそぶりをした後答えた。

「私は赤を司る斯衛ですか。」

「そうか…。その暁、煌武院家に伝えておぐ。」

「他の五摂家は黙つていないと感じますが？」

「ほつほつほ、大丈夫じや。」

お主の修羅道は、まだまだ始まつたばかりじや。ここで歩みを止める訳では無かるう。」「

それもそうですね…と小さく呟いてその場を後にした。

第5話・修羅の道（後書き）

フルボッ「…かな？」

一貴はひとりぼっちのままです。
でも多くの大人達が彼を見守ってくれています。
そういう事に気づくのは何時だつて遅いものですね。

ここでは、一貴の設定を少々いじります。
眼鏡を掛けているとき、黒田に見えるところはそのままです。

ですが、眼鏡着用時はウォルター少年、青年。
眼鏡を外したときはアーカードと言つた具合に変更します。
凶悪さの演出です。

それでは

第6話・表面化する陰謀（前書き）

筆者は陰謀論者ではありません。
残酷描写が入ります。

第6話・表面化する陰謀

駐日米大使館に一通の封書が届く。

宛名もなく、切手も貼られていない、端から見ると危険な郵便物である。

しかし、駐在武官はそれを見るなり箝口令をひき、大使館の内部で一番秘匿性の高い部屋へ移動した。

扉を開けるとそこには、初老の男性がパイプをふかしながら、目をつむり座っていた。

武官は敬礼をした後、その怪しげな茶封筒を開封し内容を確認する。全文を読み終えると火をつけ、近くの灰皿に投げ捨てた。

「どうやら暗殺に失敗したようです。」

「そうか…。本国へは私から連絡しておく。」

駐日米大使マイケル・マンスフィールドは渋い顔をしつつ答える。武官は、今日は何も見ていません、と述べた後退室する。

その姿を見届け、マンスフィールドは通称”Superman tube”と呼ばれる公衆電話ボックスのような極秘通信用の個室へ行き、ホワイトハウスへ報告を上げた。

報告だけのつもりだったのだが、そのまま大統領へと通信が回される。どうやら直接聞きたいよつだつた。

「暗殺は失敗したかね？」

「！？」

大統領それはどういう事ですか？

暗殺を「J命令なさつたのは大統領ご自身ではありませんか！
Amaki Familyは日本にとつても世界にとつても重要な人物だったのですよ！

その暗殺指令をまるで望んで無かつたかのようだ…」

マンスフィールドは戸惑い、ついつい声を荒げて問い合わせる。
しかし大統領は失態を気にせず、彼の言葉を妨げ再度質問した。

「それでどうだつたのかね？」

「失敗しました…」

受話器からは、ため息と共に椅子に座る音が聞こえてきた。

「Jの通信はチューープからだつたな。」

「はい、その通りです。」

「私はあの時、君に日本との架け橋を、そして平和を頼んだ。
日本とこう国と共に歩み、極東のBETA侵攻食い止める為に。
今回の件、Amaki Kazuki 暗殺命令はそれに矛盾している事だ。

本当に済まないと思つてゐる。

だが、あの命令は私が出したものではない。

その偽の命令書を知つた私はAmaki Nyuuunaburo
uに連絡したのだ。

息子が狙われている、と。

「そんなことが！？」

「いえ、私も貴方がそのような命令を出すわけが無いと思つていま

したが…

まさか、そんな…
では、ホワイトハウスに裏切り者がいるといつことですか？」

「…ホワイトハウスだけではない。

アメリカ、そして日本にも”彼ら”的シンドバードがいる。」

“彼ら”？彼らとは何者なのでですか？」

そこでまた大統領はため息をつく。

「それがよくわからんのだ。

Z y u u n a b u r o u から聞いた話では、A m a k i K a z u k i 暗殺に関して赤の斯衛が絡んでいたそうだな。」

「ええ、その通りです。

T u k u y o m i …なんたらを差し向け殺す予定だったそれで。
日本の文化にはH a t a s h i z y o ?なる決闘で公然と殺すとの話でした。

子供同士で斬り合いとは非常にカルチャーショックではあります
たが。」

「それだけか？それしか聞いていないのか？」

「C I A からはそう聞きましたが？」

「…そんな内容でK a z u k i を暗殺出来るはずがなかろう。

実は、今朝ホワイトハウスの前にステッケースが4つ置かれていた。

当然報道されていない。この意味がわかるかね？」

「いえ…わかりません。」

「4つとも屈強な男性の死体が入っていた。米軍が支給している迷彩服と銃込みでな。体は鋭利な刃物で”さばかれていた”。

そして丁寧に首が切られスーツケースの上に並べられていたよ。また、同様の死体が日本でも発見された。そつちは日本人だつたようだが、こつちは米国人だつた。しかも、”すでに死んでいるはずの”。

「CIAが私に嘘の報告を？既に死んであるはず？わ、訳がわかりません…

どういう事ですか！大統領！！」

「そう、焦るな。

その後、zyuu zaburo ouから連絡が来たよ。決闘の邪魔者がいたと。

まあ、こんなにダイレクトには言わなかつたがね。

そして、4つの死体を調べたところいずれも元合衆国陸軍特殊部隊所属隊員だつた。

私も知らない部隊があるのだろう、この国には。ここからが大事なのだが…

彼に言わせると”キリスト教恭順主義派”が絡んでいるというのだ。

だがそのような組織名はいくら調べても出でこない。

「私も聞いたことがありません…。」

「そこなのだよ…。

なぜ彼を敵視しているのかがわからん。

我々はBETAの他にも敵にまわしているようなのだ。

我々米国にとって彼の死はBETAとの戦いにおいて札を一つ失うのと同じだ。

君にも協力して欲しい。」

「わかりました大統領。

極東の平和のためにも必ずや。」

「頼んだぞ。マイケル。」

「はい、レーガン大統領閣下。我が合衆国に平和と栄光を。」

そのまま受話器を切る。

自分の直ぐそばにも敵がいるとマンスフィールドは実感した。
彼は大統領の為にその足を動かし始めるのであった。

第6話・表面化する陰謀（後書き）

瀬戸様のような女性はいいと思します。

最高です。

なので重三郎を贔屓します。

暗躍します。

キリスト教恭順主義派の情報は当然のじとく、ナチからもたらされ
ました。

それでは

第7話・友愛 + (前書き)

10 / 18

月詠マナ主觀です。

若干の描写変更という形をとりました。

第7話：友愛 +

「本日、日本時間10時30分頃、米合衆国レーガン大統領は銃撃による大量失血により、大学病院で死亡が確認されました。これを受け副大統領である…」

「暗殺を企てたと思われる人物は当局によって現行犯逮捕されたものの、警察署へ送致中に射殺され…」

「大統領の死亡を受け、帰國中だつた駐日米大使マンスフィールド氏を乗せた飛行機は、依然、北太平洋で通信が途絶しており…」

テレビのチャンネルをいくら変えても同じ事ばかりだ。

米国の大統領がどうこうなつても日本には関係ないではないか。

「ふう…ッ！」

痛い。

肋骨が折れているのだ。

マヤ、私の姉は軽傷で直ぐに学校へ行つたが、私は全治5週間の重傷と医師に診断されてしまった。

故に入院中だ。

そもそも、その原因は私達にある。

天木一貴に決闘を挑んだ…そして負けて…

…先日、紅蓮中将がお見舞いに来てくださいった。

「月詠よ…決闘に負けたそうだな。」

「これは紅蓮中将閣下お恥ずかしこと」いを。

ベッドから起き上がるひするマナ。

「いや、けが人は寝ておれ。」

紅蓮の大きな手でその動きを制す。

「お心遣い感謝いたします。」

大きなメロンと花を持つて来た紅蓮は、そのままメロンを切り始める。

部屋にいた侍従は花を飾り終えると部屋を出て行く。

「なあ月詠よ、何故天木一貴に手を出した?」

マナの皿を見ずに軽い口調で問つた。

「それはっ…、紅蓮中将こそ良いのですか!?

あのような怪しげなる奴が煌武院家の守護をしてつー。

そこまで言つてつづくまる。

腹に痛みが響くのだ。

切り終えたメロンを皿に移しつつ紅蓮はため息をつく。

「はあ…、天木殿の何処が怪しいというのだ。
それに煌武院家の護衛などといつ話は上がっていないぞ？」

「は？ 紅蓮殿はご存じないのですか？」

ある権力者が煌武院家の護衛に、彼奴を推薦したのですよ。
あんな怪しい天木家を押すなどとは笑止千万。

明らかに没落の一途を辿る天木家を生きながらえさせようとする
商人の考えに決まっています。

聞くに、あの天木家はアメリカに兵器を売り莫大な利益を得てい
るそりでは無いですか！

これはもうアメリカの命令に違ひありません！

あの汚い商人どもがアメリカに媚びを売つて儲けをさらに出そう
としているのです。

煌武院家の護衛をし、発言力をつけようとする魂胆が丸見えです
！」

紅蓮は話を噛むように聞きメロンを円詠に差し出す。
それに礼を言つてマナは食べ始める。

「そのような世迷い言…一体誰が…」

独り言のように紅蓮は呟く。

だがマナはその言葉を聞き逃さない。

「世迷い言とは紅蓮閣下！」

私達はあの有名な兜玉誉士夫様から直に聞いたのですよー。」

ハツツとした顔をした月詠。

実は無理を言って聞かせていただき、秘密に、と言わっていたのだ。

「…月詠。それは真か？」

「マヤはそのまま俯き、小さくうなづいた。

「はつはつはつ！」

月詠、兜玉様に一本とられたなあ…」

励ますよつて月詠の肩を叩く紅蓮。

「えつ。」

「兜玉様はからかわれたのだよ。
その様子だと、しつこくお尋ねしたのだろう?
ある権力者とは私のことだ。まあ、推薦はしておらんがな。
誤解がないよつて言つておくが、彼が武術に長けているといつ話
を煌武院様にお話しだけだ。」

「し、しかし、確かに護衛に推薦されたと…」

「何かの聞き間違えではないか？

煌武院様がとても関心を持つてゐる…といつ言われ方をしたので
は？」

「言われてみればそんな気も…」

「はつはつはつ。そういう事だ。

一貴殿には謝つておくれのだぞ。」

「で、ですが…」

いまさらなんと言えばいいのか分からなかつた。

「大丈夫だ。彼は優しい子だよ。

現に君たちは”生きて”いる。

肋骨が折れた程度で良かつたではないか。

彼に言わせれば、を殴るのは心苦しかつたようだぞ。
実際顔を殴つていないしな。」

「それは一体……？」

「分からんのか？ 罪だなそれは。

可愛らしい顔を傷つけたく無かつたのだよ、彼は。」

そこで用詠はキョトンとした。

確かに顔を狙つてこなかつたし、体を見渡す限り目立つた外傷は無い。

手加減をしてくれていたのか…。

それに…今までにそんなことは言われたことがなかつた。

とたんに顔は赤く染まり、心なしか頭から湯気が出ている気がする。

「か、かわいいとは、破廉恥な！」

そう考へると急に彼の顔が浮かぶ。

今まで考へてこなかつたが、顔は美形だし、強いし、名声も…
そこまで考へて頭を強く振る。

「ぐ、紅蓮閣下の御前で恥をかかせおつて！

次あつたら呪き切つてやる……」「

「ははははっ！そんなことを言つたな。

彼にきちんと礼と説びを入れておけよ。」

そう言つて紅蓮中将は行つてしまわれた。

今回の件、決闘は私達の早とちりに過ぎなかつた事を教えられてしまつた。

早く一貴殿に合つて謝らなければ……

物思いに耽つているとドアをノックする音が聞こえた。
侍従がドアを開けに行く。

私はテレビのスイッチを切つた。

なにやら騒がしい。もめているようだ。

「どうしたのだ？客か？」

「は、はい…ですが…」

困惑していいるようだが客は客だ。

「構わん、通せ。」

「はい…私は外で待たせていただきます…」

「ん…」

するとカーテンレールが開けられる。
そこには一貴殿がいた。

「き、貴様は！」

ついつい指を指してしまった。

右手には籠に入った林檎、バナナ、左手にはゆずレモン茶と書かれた瓶を持っていた。

「貴様は無いだろつ、貴様は。」

「ふん！ 貴様など貴様で十分だ！」

胡座をかけてそっぽを向いてしまった。
冷静に考えればかなりの非礼な態度だ。
紅蓮閣下の仰つた謝罪が出来ないではないか！

「まあ…いい。見舞い品だ。受け取つておけ。」

備え付けの机の上に見舞い品が置かれる。
そして椅子を引きずり出し一貴殿は座る。

水をうつたような静けさが空気を支配する。

私はただ一貴殿に謝りたいだけなのだ。
だがしかし、当の本人を目の前にしてしまうとそれが出来ない。
そもそも彼は何しに来たのだろうか？

一人で勝手に現状理解に努めていると、突然相手が頭を下げてきた。

「月詠…

すまなかつた！！」

「お、おい！何で貴様が謝る！

元はと言えば私達が仕掛けたことなのだぞ…」

そう、私達の勘違い。

私達が謝るべき所。

「いや、女の子に手を上げてしまった事実だ。

それに怪我までさせてしまった。

すまない。本当にすまない。」

それを自分の責任として受け止めようとしてくれている。
私が”女の子”だから…。

男だつたらこりうはならないのだろうか？

いつもだつたら、男、女と差別するな！、と言つてゐる。

だが、今回は不思議と”女”として認識されている事に喜びさえ感

じてゐる。

「いや…いいんだ。

頭を上げてくれないか。」

頭を上げてくれ欲しい。

頭を下げるせている私が悔しい。

「良いのか…？」

私達は腹を切つて詫びなければならぬほどの事をしでかしている

筈だ。

それを流そうとしている。

この“男”は…

「いい…」

そうして彼は顔を上げる。

不覚にも田が合つてしまい、私の胸は高鳴ってしまった。

「くつーき、貴様は手加減をしたようだな！」

「いつか貴様を追い越してやるからなー覚悟しておけよーー馬鹿ー！」

馬鹿なのは私だ！！

なんでこんな事を言つてしまつのだらうか。

まともに話が出来ない。

「ば、馬鹿つて…」

彼は苦笑いをして頭を搔ぐ。

若干俯き加減になつて一貴殿は考え込む。

馬鹿、馬鹿と罵倒ばかりしていれば嫌になるだらう…。
嫌われてしまつただろうか？

そして私は少しのぞき込むようにして彼を見る。
すると急に顔を上げ、にこやかな顔で「こっちを見る。

「いや、分かつた。いつでも勝負を受けてやる。
だが、今度は決闘（死合）はよしてくれよ。
手合わせで頼む。」

突然の笑顔に動搖してしまい変な事を口走ってしまった。

「て、手を合わるだと…！」

何を破廉恥なことを言つている！

早く帰れ！」

自分の言つている事が恥ずかしくなつてしまい、机に置かれたせつかぐの見舞い品を掴んで彼に投げてしまう。

「おいおい…よしてくれよ月詠。

わかつた。帰るから。」

と、いそいそと出て行つてしまつ。

何でこうも簡単に引っ込んでしまうんだ。

私が馬鹿みたいじゃないか。

「待て、天木！」

つい、止めたくなつてしまつた。

「どうした？」

彼は振り返る。

だが私は窓の方に顔を向けてしまう。

「その…だな。

わざと顔を殴らなかつたそうだな。

何でだ？」

聞く必要の無い事をつい聞いてしまつた。

「や、それは…」

急に一貴はどもつて頭を搔いている。

「か、かわいい女の子の顔を傷つけるのはどうかなって…」

く、くそつ！

なんて卑怯な奴だ！

「フンッ！破廉恥なお前らしい理由だなー！」

そもそも何が卑怯なのだろうか？

「す、すまんな、月詠。」

そこへまた外に出ようつとめる。

「ま、待て。話は終わっていない。」

呼び止めておきたい。

もつと話を聞いて欲しい、もつと見ていて欲しい。

そんな気持ちが芽生え始めてしまった。

「私のことは、や、その…、マ、マナと呼んでいいぞ！

いや！決して許した訳じゃないからな！

宿敵として認めてやつただけだ！

許してもいいのかどうの苦なの…。

「 もうか……じゃあ俺のことも名前で良こよ。」

それなりにその事は咎めない。
もう、どうすればいいのだ！

「 うるさい……早く帰れー馬鹿ー！」

また、馬鹿と言ってしまった。
彼はそのまま帰ってしまう。
うう……やうなると心苦しい。
自分が恨めしい。

そんな事を考へてると彼のあの笑顔が浮かんでくる。

「 一貴か……」

何故か彼の名前を呟いてしまって、急に恥ずかしくなりベッドに籠
もつてしまつた。

第7話・友愛+(後書き)

紅蓮「アタックチャーンス。」

すいませんでした。反省しています。

児玉 清さんが亡くなつた時は非常にショックでした。

さてさて、ついにマナさん…ああしたね…。

彼らはまだ7歳ですからね。

青春ですね。

ちなみに警士夫さんは、この後友愛され…
おや、誰か来たようだ。

10/18

いかがでしょうか？

好きな子をいじめてしまつ…そんな心理を描[写]してみました。

そして、男と女を意識する年頃？

あれ？普通中学生くらいですよね？

…この世界の人々は精神年齢が高いのでしょうか？

照れ要素は難しいです…。

それでは。

第8話・K y r i e e l e i s o n (前書き)

陰謀論の極みです。

第8話・K y r i e e l e i s o n

メキシコにある、とある教会に電報が届く。それを十字架を首にかけた一人の青年が受け取った。彼の表情は明るく、非常に晴れやかだった。

「助祭様、良いことがあったので?」

郵便局員は十字を切つた後聞く。

「ええ、それはもう。

これはGood news(福音)ですよ。
こんな日に来る電報はさぞ、幸福な内容でしょうね。
貴方にも神のご加護を。」

そう言って礼拝堂の扉を閉じる。

そこには修道着を着た一人の女性が居た。
彼女を確認すると、歩きながら電報を開く。

「ああ、神よ、何故我を見捨てたもう…」

先程までの嬉々とした表情とは打って変わって、悲壮めいた顔になり、倒れ込むように膝をついた。
それに驚いた女性は駆け込んでくる。

「どうしたのー!?

泣いている、彼は、泣いている。

父が死んだ時は泣かなかったのに。

「友が…我らの友が…亡くなりました。」

「どうゆうことよ…

答えなさい…トリフォア！」

泣き崩れてまともに話が出来ないこの男、ヴァレリア・トリフォアの胸ぐらを掴み揺する。

「私は何も聞いていないのよ！

貴方から”あれの”解読が出来たからって来てみれば、何よーこの様は！

我々は何千年もこの時を待っていたのよーーー

それでも反応しない。

目からは滝のように流れる涙。

しかたない、と咳き彼を抱いで個室へ移動する。

身長190cmもある巨体を抱ぐこの女性の名は、リザ・ブレンナー。

身長174cm、B:93 W:60 H:91といつ、シスターならざるグラマラスなボディを持つている。ちなみにFカップだ。

彼女の存在が人類にとって福音と言つても過言ではない。

が、今回の問題はそこではないだ。

個室に着きトリファを椅子に座らせ、水を差し出す。未だ虚ろ目だつたが、頷いてそれを受け取る。飲み終えた彼は一息つくと、話し始めた。

「確かに解読できました……しかし……」

「はあ……解読できたのは分かつてているのよ。

それでそれと今回の電文はどう関係あるのよ?」

真っ赤に腫れた目をハンカチで拭きながらトリファは答える。

「我らの教義、”汝ら耐えよ”は覚えてますね?」

「それはそうよ。

それが我々の行動理念であり、根本理念だもの。

『聞こえし者伝えよ。

汝ら迷える子羊達、新たなる扉開く時、悪魔に合ひにけり。

されど、それ悪魔にあらず。神の子なり。

汝ら耐えよ。審判の日は近い。』でしょ?

そして”赤、白、黒”。

これがあの”失われたモーセの言葉”。

つまりは”カバラ”を用いた我々の世界解釈の仕方。

または”世界樹”の活用、って言っても良いわね。

まあ、そのまま理解してしまった、残念なキリスト教徒がいるわけだけど。」

そんなこと常識でしょ?、と、蔑んだかのよつな囁つきで机にもたれかかりながら答える。

解釈の仕方は様々である。

失われたモーセの言葉はルーン文字で書かれており、それ故に伍長は、ゲルマン人こそが優越民族だと叫び始めた。

そこまで聞き少しうなるような声を出しながら彼は話を続ける。

「そう…。先代の方々は新たな扉を無理に開こうとし、ナチス・ドイツに手を貸した。

そして、あのカルトマニアは我々の意見を無視し、暴走し始めた。故に我々がアメリカを使って止めたわけですが…」

彼らはナチス・ドイツを利用し新たな扉を開こうとした。

そして”ウイスパーード”（聞こえし者）は、ナチスの資金を用いて、聞こえてくる声を頼りに様々な兵器を作り出した。

ヘルル StG 44

ジエット戦闘機「Me262」

V1飛行爆弾

V2ロケット

ヴァッサーファル

ステルス技術等々：

挙げればきりが無い。

そしてそれこそが、現代兵器の源となっている。

だが、余りにも力を付けてしまったナチスは1000年帝国なる世界創造をしようと夢想し始める。

これは彼らが望む世界ではなかつた。

世界全てが平等に力をつけてもらわなければ、審判の日は耐えられない、と言つのが彼らの考えだつた。

ナチスの1000年帝国は力による征服、若しくは屈服…。これでは世界がまとまる筈がない。

ローマを繰り返す事となる。

よつて、自由の国であるアメリカ合衆国に彼らは目をつけ、新技術の提供をし始める。

それが原子爆弾であり、ロケット技術だ。

この技術を用いてアメリカは第一次世界大戦に勝ち、世界に”影響力”のある国となる。

そして、冷戦。

地球上に扉がないことは国際連合を通して分かつた。ならば宇宙にあるはず。

そういう考えがあり、米ソは宇宙開発に力を注ぐ。

結果、火星に”扉”が発見された。

それと同時に”神の子”（BETA）を発見し今に至る。BETAの認識は彼らの組織内で大きく分かれた。

BETAは神の子であり、神は我々人類を試しておられる、ここまでは共通認識、この後が3つに分けられる。

- 1、それによつて人類が滅ぶとしても、それは神の意志であり、無為に逆らう事は教えに反する。（キリスト教恭順主義派）
- 2、それに抗う事こそが、神の意志であり、戦い続け約束の地を得

る」とこそが真理である。（シオニズム）

3、それに抗い、我らのメシアが到来するまで耐え続け、最後まで抵抗する。（メシア主義）

もとはと言えば、3つめの主張が源流だつたが、今やそれを信仰する者はあまり多いとは言えない。

そしてその信仰の大本が彼ら、聖槍十二騎士団（「D.O.」）である。

「まあ、結果として”扉”の位置はわかつた訳だし、よかつたんじやない？」

我々”ウイスパード”の役割は果たされたのだから。」

ブレンナーの言葉を聞いた瞬間、トリファはハンカチを床に叩きつけて叫んだ。

「違うのですよ！――

我々の役目は終わっていなかつた！――

彼の眼光は異常に鋭くなり彼女を睨みつける。

「あれには続きがあつた！――

それこそが今回の解読の結果！――

『彼の者を待ちたまえ、聞こえし者よ。

彼の者、漆黒のたてがみ、赤き瞳、純白の肌を持つ者なり。

その者、樹に愛されし者なり。

愚かなる者、神の御技使いし時、彼の者田覚める。
然れども、未だ彼の者迷える子羊なり。

されど、彼の者に従え、聞こえし者よ。

彼の者救われし時、大いなる力放たれなん。

新たなる扉開きし時、汝ら皆繫がりて世を超越す。

聞こえし者よ、彼の者愛せよ。

彼の者友なり。』

我らは…我らの唯一の友を…今日失つてしまつた…。
解読するのが遅すぎた…。もう、終わりです…。』

そこまで言つと、床に崩れ落ちるトリファ。
開いた口がふさがらないブレンナーは、え、え?と何度も繰り返していいる。

「ま、まさか、その友つて…」

「重三郎様です…。」

最後の手がかりが今日亡くなつてしまつた…。』

「う、そ、でしょ…」

「いえ…本当です。」

ブレンナーは放心状態。

対して、トリファは平穀を取り戻しつつあった。
彼女の肩に手をやわしく乗せる。

「リザ…ショックなのは分かります。

しかし、聞こえし者よ、彼の者愛せよ。彼の者友なり。

この教えに沿つて重三郎様にお別れを言いに行かなければ…。
これも、神のお導きかも知れません。
終わりだと分かつっていても、抗い続け、耐えるのが我々だつたは
ず。

さあ、行きましょう、リザ。」

ブレンナーは泣き崩れてしまった。

それを彼は胸を貸す事で癒す事にした。

第8話・K y r i e e l e i s o n (後書き)

父ヴァレリアン・トリファは亡くなり、跡継ぎはヴァレリア・トリファとなりました。

ンが有るか無いかの違いです。

D i e s i r a e のキャラは一部しか出ません。
聖槍十三騎士団の欠番も有ります。

テンプル騎士団の旗は赤、白、黒。
ナチス・ドイツの旗も赤、白、黒。
聖槍十三騎士団の旗も赤、白、黒。
類似性が有つたのでつけ込ませて頂きました。

駒が揃いつつあります。

暴れられるのはもう少し先…。

第9話・邂逅の時（前書き）

10 / 18に 第7話・友愛 を更新しました。

今日は長めになってしましました。.

第9話・邂逅の時

「祇園精舎の鐘の声、か…」

葬儀中誰かがポツリと呟いた。

それは一貴に対して言った言葉なのか、それとも自分自身に言った言葉なのか…。

榊は彼を思つてか、無言で刀を抜こうとした、一貴はそれを手で制す。

「おじさん、ありがとうございます。

父はそんな事を望んで無いと思つ。」

それを見ていた内海も懐から手を引いた。

榊は何か言おうとしていたが、先に一貴が話し始める。

「この「」時代、ああゆう事を言つのはもつともだと思います。

あのかつての強国、ソ連がアラスカに逃げるほどの人類の敗走劇。

それを目の当たりにして弱気にならない方が不思議です。」

1982年初頭、ソ連は米国に頭を下げてアラスカを租借させてもらい、移住が次々と進んでいるらしい。

ソ連と言えば米国と冷戦を繰り広げた大国。

ニュースでそれを聞いたときは日本中が驚愕させられた。

あのソ連が撤退している、と。

そして、ヨーロッパもBEITAにほぼ制圧されかかっている。

「50年という期限付きで租借していますが、果たして人類がそこまで…」

「坊主ーその先は言つちやいけねえ。」

「JのBETAとの戦い、既に詰みなのだ。

皆それを知つてゐる。

いくら、いくら戦つたところで押されていく。

戦争の基本は物量、人海戦術。

まあ、大量破壊兵器が有れば話は別だが、今は無い。あつたところで意味は無い。

大量に打ち込んだところで光線級に落とされるだけであり、仮に当たつてもほぼ無限にわいて出てくる。

そしてBETAの生態系も殆ど分かつていないので。

「やうですよ、”会長”がそんなんだと現場の我々が萎えてしまいますよ。」

内海はいつもの笑みを崩さず苦言する。

朝、目が覚めると一貫はいつものように服を着替え、顔を洗い、うがいをし、歯を磨く。

いつものように自室を出て、いつものようにトーブルにつき、いつものように食事を待つ。

ただ一つ、重三郎が席にいない事を除いて。

女中達はいつもならいる重三郎が居ない事に驚いていたものの、呼びに行つて良いものか考えあぐねていた。

「誰かおじさまを呼んできてください。」

畏まりました、と返事をし頭を下げて外に出る。
じじいがいなだけでも、この大きなテーブルはもつと大きく感じるものだ。

数分後、扉が強く開けられる。

「何事か！」

上女中は声を上げる。

「重三郎様が！重三郎様が！…！」

異常に動搖して叫んでいた。
息を整えつつ、また叫ぶ。

「止まっています！心臓が止まっています！…」

重三郎はベッドの上で静かに息を拭き取っていた。
医師の診断結果では老衰。

享年83歳。

遺言は簡潔に一言。

「全てを息子である一貴に。」

法的には全く意味の成さない書き方。

それでもその通りとなり、天木商会、天木重工業は重三郎の意志を尊重し、天木一貴を正式な跡取りとして認めた。

まだ8歳という若さで天木家当主となり、そして天木グループの牽引者となつた訳だ。

この現状に人事は大きく動いた。

天木商会には内海を、天木重工業には榊を筆頭として動く事となつた。

榊は帝国陸軍技術大佐、兼、技術廠・第壹開発局部長。

彼は82式（F-4改）撃震の名付け親であり、かつ、開発主任である。

その伝説的とも言える彼が、帝国陸軍を辞め天木重工業に戻つてき

た。

内海は天木重工業、戦術機課課長。

新OS、つまりは「ASURA改」開発、そして「Zephyr Phantom System」の開発主任をしていた。

実は彼、天木グループに来る前はかなり非合法な商売活動をしていたらしく、公安当局に逮捕される寸前に重三郎に助けられた過去がある。

曰く、アウトローな商売では世界一位だつたそうだ。

しかし、重三郎の実力主義のお陰で会社では好き勝手な事が出来、それ以来そういう関係からは一切手を引いている。

実際、業績を上げ続けているのは彼の合理性が一端にあるのだ。

幸い、天木家は他の殆どの武家との縁を既に切つており、関わりがあるとすれば、煌武院家とその身辺、そのくらいである。

故に今回の相続関係に一切口を挟んでこなかつた。

突然、背後にいた黒崎が耳打ちをしてくる。

「会長、ドイツ系の方々がいらっしゃるようです。」

「ドイツ系…ああ、ナチの関係者ね、と脳内で納得しつつ、頷いて返事をする。

ぞろぞろと…。

ざっと100人、いや1000人！？

一人一人、一貴を見るたびに握手を求めたりハグをしてきた。

一言一言思い出話や、礼を言いながら皆涙を流し、感極まっているせいが皆ドイツ語だ。

そこで一貴は思い出す。

自分は今まで泣いていなかつた事に。

その一団の最後に長身の男性と、美しい女性が喪服姿で現れ、一貴を見ると頭を下げた。

「初めてまして、一貴さん。

この度は…心からお悔やみ申し上げます。」

流暢な日本語が出てきた事に少しばかり気をとられたが、一貴も頭を下げる。

「…お心遣いありがとうございます。」

顔を上げ長身の男性は話し始める。

「突然の重三郎様の死、私たちは非常に困惑いたしました。
しかしながら、老衰という天寿を全うされた亡くなり方…。
我々も…」

と、話している途中、隣の女性が彼を肘でつついた後、咳払いをした。

恐らく、名前を紹介していない事に対する一貴の心情を察してくれたのだろう。

彼は一貴の顔を見て、申し訳なさそうな顔をした。

「申し遅れました…。

私、ヴァレリア・トリファと申します。

父のヴァレリアン・トリファがお世話をになりました。

彼女はリザ・ブレンナー。

教会のシスターです。」

「貴方がヴァレリア・トリファさんですか！

お初にお目にかかる。

私も貴方のお父上には大変お世話をになりました。」

「しかし、重三郎様がしてくださいた事に比べれば…、と謙遜する。

「しかし、重三郎様の死は人類にとって大きな損失となりました。」

「…父は本当に偉大な方だったと私も思います。」

「なんと…一貴様、今”父”と…？」

亡くなつた時からだらうか、いつの間にか、じじいではなく”父”と呼んでいる一貴がいた。

今の今まで誰も気づいていなかつた。むろん本人もだ。

「おお…重三郎様もきっと喜んでいらっしゃる…」

「喜ぶ?なぜ?」

一貴は本当に分かつていらない様子だつた。

トリフアは慈悲の眼差しで話し始める。

「重三郎様は一貴様の事を本当に大切に思われていた。

私の父に会うたび、こう漏らしておられた。

『いつも、一貴は父と呼んでくれないのじや。じじいじじいと呼ばれている。

でも、一貴は私の息子。あの子は大切な子。

例え血が繋がっていなくとも、私の息子なのじや。

今度は何が起ころうとも守り抜く、今までではそれが出来なんだ。しかし、今回は、今回こそはそれを成し遂げる。

それが儂の最後の生き様よ。』

決意表明を私の父に毎回する…。素晴らしい”お父上”に巡り会えましたね、一貴様。』

「そう、ですか…」

そんな事だったらもつと早くに呼ぶべきだった…。

私の恩人にして私の養父。

感謝しても感謝しきれない存在に今まで何が出来ただろうか。

心なしか一貴の目は潤んでいる。
涙を堪えていっているのだ。

「しかし、重三郎様は感謝を望んでいなかつた。
『それが、親子というもののう。』、と。」

まるで一貴の心情を読むかのよつた言葉。

ついに、彼の涙腺は決壊した。

ぽたりぽたりと、大粒の涙が流れ落ちていく。

「 「 「 …… 「

誰も声をかけられなかつた。
だが背をさする事だけは出来る。

「私は…父のしてくださつた事に感謝している…
でも、今となつては、その言葉は届かない…
なれば黄泉の国まで轟くよつた武勲を立て、その恩に私は報いる
！」

眼鏡を外し涙を必死にぬぐいながら宣言する。
それはつまりB E T Aに勝つという事だ。
内海も榎もトリファそれに同意するよつに強く背中をさすり涙した。

だが、ただ一人、リザ・ブレンナーは破顔していた。

日本人離れしたその容貌には当初腰を抜かしそうになつた。

黒い髪、白い肌、そして美しい顔。

これはさぞ女性にモテるだろうと思ひ、心中でほくそ笑んでいた。

しかし眼鏡を取った彼の目はどうだろう？

赤だ。

一瞬、身体がふらついた。

目を見た瞬間、脳裏に言葉が走る。

『彼の者、漆黒のたてがみ、赤き瞳、純白の肌を持つ者なり。その者、樹に愛されし者なり。』

樹に愛されし…つまりは生命の木に愛されている者。

”天”の”木”、そして”一”人の”貴”い人。

天木一貴。

「ああ…」

全身が震え出す。

このお方だ、このお方こそが我らの救世主。
彼の者友なり。

本当に友だ。我々唯一の友だ。最後の友だ。

「Ich erinnere euch, Br?der, an
das Evangelium, das ich euch
verk?ndet habe. Ihr habt es an
genommen; es ist der Grund, au
f dem ihr steht.
Durch dieses Evangelium werde
t ihr gerettet:」

彼女はそのまま膝をつき祈りの姿勢をとり祈りを捧げ始める。

「第一コリント15章?」

トリフアは突然の出来事に目を点にしている。
だが、彼も頭の切れる男、それに至った。

「!?

まさか!」

一貴の顔を凝視する。

一貴も自らの失態に気づいたのか目を隠す。

ますい…舌打ちをしたのは内海だつた。

そして、いつの間にか抜いてあつた銃をトリファアの眉間に構えている。

同様に榊もブレンナーの首筋に刀を突きつけている。

今にいりて、ここへひを殺してお土産のナチの闇わづ合に日本國のビザン禪をばねる。

赤い目という事が外部に漏れてみると天木ケル一ノは一発で二ふれ

ながほー！

2人は手に力を込めようとした。

トリファは突然、壊れたように笑い出す。

天を仰いで、身をよじつて、声高らかに大笑している。

「へへへへ、なるほど、なのほどかですか。

素晴らしいですよ、我が友よ。

何を笑つてゐる！？

氣でも狂つたのか。

内海はこれ幸いと引き金を引こうとする。狂った奴が会長を殺そうとした、素晴らしいデコイだ。

「否、狂つてなどいませんよ。

私は正常だ
」

心を見透かされたようで内海は一瞬たじろぐ。
その隙を突き、トリファはその巨体翻し神の刀を蹴り飛ばし、ブレンナーを抱きかかえた。

「Auf Wiedersehen .

我が主にして、我が首領閣下。

次回伺いする時は、正装にて参上させていただきます故に、今回の無礼はお許しください。」

頭を垂れ、最後まで言葉を発すると、足下に手榴弾らしき物5・6個を落とす。

「「危ない！！」」

神と内海は一貴に覆い被さるよつに押し倒す。
警備員は今更になつて銃をトリファ達に向ける。

しかし、時は既に遅し。

爆音と閃光、ついでに煙幕をまき散らし、彼らはその場を去つていった。

第9話・邂逅の時（後書き）

聖槍十二騎士団…

色々と規格外な面々になるでしょう。

しかし、Dies iraeのようなレベルにはなりません。

そんな事をしたらBETAどこの話ではなくなります。

なので、このお話ではカルト的宗教の集団、そして最高の頭脳集団、または最強の武力集団、という位置づけで踊ってもらいます。

フルメタのアマルガムのような、ミスリルのような組織…でしょうか。

いずれにせよ規格外な事には変わりありません。

しかしそれ、榎さんといい内海課長といい、とんでもない頭脳を天木家に置いたしました。

といつも、Dies iraeとか、こいつ有能？キャラがいないとマブラーの世界つてつくづく詰みなんだなって思います。

：ただ、天地無用！のキャラを入れたら一発で終わりますよね。彼らは今回の作品にはほぼ出させません。

それでは。

第1-0話・狂氣の産声（前書き）

幼少期これまで終わります。
連日投稿で長いです。..

第10話・狂氣の産声

8：10 学校の門が開く時間。

5分もしない内に生徒が次々と登校してくる。

ある者は徒步で、ある者は自転車で、そしてまたある者は自動車で。

ただ、今日の学園の様子は少しおかしい。

警備員がいるのはいつもと変わりないが、制服、黒のスーツ姿の警察官が外堀に沢山いる。

耳に手を当てたかと思えば、皆急に辺りを見渡し、警戒し始める。

すると、白バイ3台、パトカー1台に先導されて赤色灯を上げた黒塗りのセダンが2台、後方にはパトカー1台が、1台のセダンを守るようにして門の前に止まった。

車からは完全武装した警官が数人出てきたかと思えば、サングラスをかけたスーツ姿の厳つい男達がわらわらと出てきた。

彼らは、周辺の安全確保をしたあと、一人の子供を守られるようにして門をくぐる。

天木一貴は先日の葬儀場”襲撃”事件により、以前から天木家はVIPとして国に認定させていた事もあって、警察の警護対象となつた。

誰の襲撃なのかは未だ明らかになつておらず、マスコミは極右テロリストの犯行と報道している。

しかし、武家には、天木一貴がナチスのシンパに狙われたという噂が流れおり、天木家が脅迫を受けているという話で持ちきりだ。

真偽の程はわからない。

なぜなら天木グループは未だに正式な記者会見を行っていない。

一貴のクラスではその話で盛り上がっていた。

その中で赤い斯衛の服を着た2人組は内心穏やかでない。

怪我はないのか？重三郎様の死は精神的に辛くないか？

そんな言葉ばかりが頭に浮かんでくる。

月詠マヤ、マナは決闘をした後、一貴とはこの1年間、比較的良好な関係を築いている。

葬儀に行こうとしたが襲撃の報が届き中止となり、かれこれ1週間以上顔を合わせていない。

良好、と言つても彼女達の一方的な歪んだ愛情表現だが…

「ほら、弁当だ。何故か2つもある。

一つ毒味してくれ。」

昼食の時間になるとマナが一貴の前にぶつきひびきで弁当を差し出す。

「あら、マナ？”自分で”作った弁当を何で一貴に毒味してもいいのかじひっ。」

自分という所を強調してマヤは言い放つ。

「うぐい…」

道理だ。図星を付かれて言い返せない。

「毒味なら侍従にまかせなさい。

それはそうと、一貴殿。私のお弁当を食べてみてくださいませんか？

「私、”花嫁”修業の一環で殿方の意見を頂きたいのです。」

天使のような微笑みに、白い肌を僅かに赤く染めて一貴に尋ねる。そしてまた、花嫁という部分を強調する。

この聞き方は反則だ。

これを断れる男がいたら、そいつは男じゃない。

あ、うん…と、了承しかけた所で、マナが机を手で叩いて割つて入る。

「うるさいぞ！マヤ！毒味ではない、”独味”だ！

独りの人として味を見てもらいたいのだ！！」

うあ～、無茶言つてるよこの人…と、周りの空気が伝えてくる。

「あら、独りの人とはどうゆう事かしら？」

揚げ足を取り、2人の間には火花が散り始める。

それからあーだこーだと口論が始まる。

「あの～そろそろ昼食の時間が終わってしまいますよ？」

近くに座っていた女の子がそっと声をかけた。

「「それもそうだな、一貴はどうひりを食べる？」

「うつむく時だけ息が合つて一人。

「「つていない！」」

「うして不毛な言い争いをしている間に一貴は屋上へ避難していた。こんな事は日常茶飯事、クラスの名物だ。

クラスではそれを生暖かい目で見ている人が、羨むようにしているかの2者に分かれる。

といつても彼らはまだ初等科2年。

この学園の教育水準の高さ、否、家庭教育の高さがにじみ出ている。

教室の扉が大きく開けられ、教師が教壇に立つ。
その頃には皆席につき静かにしていた。

「皆さん、おはよつ！」ざります。

突然ではありますが、天木一貴君…さんは今日をもって初等科を卒業します。」

ざわつく教室。

普段ならこんな事はない。

教師は咳払いをしつたん場を沈める。

「眞さんが動搖するのは、無理もありません。

実は私もたつた今聞かされ驚きましたが仕方のない事です。

最後の挨拶という事で、本人が来ています。

天木…さんどうぞ。」

扉の方に声をかけ、教壇を空ける。

すると2人のサングラス、黒のスーツ姿の男が入り全ての窓、カーテンを締め、教壇を挟むようにして手を後ろに組み立つた。
そして、スーツを着た一貴が入ってくる。

「眞さんはようじやいます。

」のよつな形でお別れをるのはとても心苦しいです。

先週私の父が亡くなり、私が天木グループの会長となりました。
学業は高等学校卒業程度認定試験を合格していますので、何も問題はありません。

…そんな事はどうでもいいですね。」

自嘲気味に笑つてみせる。

端から見るとすく痛々しい。

「先日、葬儀途中、襲撃を受け、これを理由に政府から警護対象者として認定されました。

私がこの学園にいる事で皆様にいらぬ危険にさらすのは私の本意ではありません。

ですから…私は一足先に卒業します。」

敬語で話す一貴を見て、皆は何となく納得した。
もういつもの一貴には会えないのだと。

「みんなには……いえ、皆様に会えて本当に良かつたです。

本当なら……仮定の話をしても意味がないですよね。

本音で話して、楽しんで……

本当によかつた！」「

敬語と友達口調が混じっちゃになつていてる。

「ありがとう！」「

逃げるようにして外へ出て行く一貴。

「待つて！」「

男の子が声を上げる。

「俺たち……また会える……みな？」

黒服がドアを開けて退出を待つている。
しかし、立ち止まって彼と月詠達、そしてみんなを見渡して一言だけつづく。

「あひ」と

そうして一貴は出て行き、クラスには静寂が訪れた。

門を出ると内海がいた。

「か・い・ひょー！」

へりくらとこつものように笑っている内海が手をふっている。

「仕事はじめましたのですか？」

若干苛つきながら問う。

聞いても無駄だがじつせ黒崎に投げていて決まつてこる。

「いやだな～ほかあね、会長が心配で飛び出して來たんですから。労いの言葉があつても良こじやないですか。」

嘘に決まつている。

無視して車に乗り込もうとした。

護衛を待たせても悪い。

「あ、まつてくださじよ～。冗談ですか～。」

一緒に乗り込んでくる内海。

良いのですか？と護衛が聞いてくるが、是、と答えるしかない。理由もなくこいつやって行動するのはありえない。

車はゆっくりと会社に向かつて発進する。

「最後の別れはどうでしたか？

といふか、会長さんなんだからもつと堂々としてくださこよ。

「…そんな『太話をするために貴様はここに来たのか？
そのために給料を払っているのではないぞ、私は。」

普段とは違うきつい言い方をする。
はっきり言つて八つ当たりに近い。

一貴も自覚している。

「ひえ～、怖いなあ～会長！」

わざとらしにリアクションをとる内海。
ため息をついて、片手でこめかみを押さえる一貴。

「わかった、すまなかつた。
本当になんの用なんだ？」

堂々としろとは神にも言っていた事だ。
改めて反省して疲れ気味に再度聞く。

「それはね。」

にんまりと笑みをこぼしたかと思つたら、カチリッと脇腹辺りに音
がした。

「うへやつ事　」

一貴はとたんに目を細めて、ドスのきいた声を出す。

「どうゆう事だ？ 貴様。
私に銃やなんやの脅しきかんぞ。
樹雷流武術をなめているのか？」

内海は若干冷や汗をかいている。

「ははははっ……」

乾いた笑いをする内海。

「冗談でやつているのか?
笑えんぞ。」

再度睨みつける。

「会長さん、ほかあね、会長さんが好きだし、前会長は尊敬もして
るし感謝もしている。
でもね、それ以上に手段の為には目的を選ばない人間なんだ。」

「何が言いたい?」

「僕は前、リチャード・王って名前で、まあ、ある組織の幹部をや
つてたんだ。

今は違うけど。

んで、当時『黒の騎士』とも名乗っていた。

「それがどうしたつー!」

痺れを切らすように低い声で小さく怒鳴る。

運転手とはガラスの壁が引かれており声が聞こえず、一いちらの様子
も見えていない。

直ぐにでも彼を殺す事は容易いがこの行為の理由が分からぬ。

「焦らないでよ~会長~。

黒の騎士つて上層部に対する嫌味で名乗つてたんだけど、それが
ばれて公安にパクられそうになつてた所で重三郎様に助けられた。

なんで、そのあと僕が逮捕されなかつたと思ひ?」

「…。

父がその上層部の一員だつたから?それともそれを上回る権力者だつたから?」

「流石会長! ほほ正解!

その上層部の組織名は…」

と言おうとしたところで会社に着いたようだ。

「会長、 続きを聞きたいなら僕の事チクらないでね
一人で会長室にきてねん 」

銃を懐にしまい先に内海は外に出て会社に入つていく。

少し一貴は考えた。

しかし、好奇心には勝てず外に出る。

会社内の警備は万全、という事で警官には納得してもらい外堀の警備を頼んだ。

会長室に入る前に動きやすい赤い斯衛の服を着がえた。

念のため短刀と銃を腰に忍ばせ扉を開ける。

中には内海が一人変わらぬ笑みのまま不自然な位置に立つていた。

室内は変わりない。モスグリーンのカーペットに幅の広い机。

米大統領執務室と言うより別次元の露大統領執務室を模した感じだ。

不思議に思いつつも戸を閉めると、勝手に鍵とカーテンが閉まり電気が付いた。

それ 자체が異変なのだが、この部屋の空気がおかしい事に一貴は気づいた。

多くの人がいる、そんな感じだ。

「会長～机の前に立つてください！」

内海を睨みつけつつもその言葉に従う。

立つと扉の前の空間が歪んだ。

いや、それだけではない、一貴の周りの空間が全て歪んだ。
そしてバサリ、と布のこする音が響き、ナチス親衛隊の軍服姿の人間が部屋を埋め尽くすような人数で現れた。

「A c h t u n g!」

トリフアが声を上げた。

彼だけは何故か神父姿だった。

「「「「S i e g H e i l ! V i k t o r i a ! 」」」

誰一人目を合わせず右手を上に上げる独特的の敬礼をしてきた。
ただ言える事はこいつらの目つきは尋常だ。

怯えるような、尊敬のような…そんな目つきだ。

彼らを觀察していると、トリフアとブレンナーが一步前に出て土下座をした。

「知らずとはいえ先日の『無礼をお許しください、閣下。』

「知らずとは？」

その前に君たちは一体何なのだ？」

姿勢を崩さずトリフアは答える。

「我々は聖槍十三騎士団と申します。内海は我々の組織の中層幹部です。」

そういうと、組織について延々と話し始めた。

要約するに、紀元前からウイスパーードという天才達が天の声を聞き、様々な兵器を作り出し、救世主と共に楽園に行こう、という宗教集団らしい。

今まで世界のあらゆる国の背後で暗躍しており、今は南極に基地があるそうだ。

「また、戦術機の考案も私達でして、元々は対人を想定した”アーム・スレイブ”という人型兵器なのです。」

「オルタナティブ計画は我々の教義を見直す計画でして、その前身の”ティグニファイド13”は我々聖槍十三騎士団の事を指します。」

とこう事はなんだ。

BETAを呼んだのはこいつらなんだな?

「呼んだというのは少し語弊があります。」

彼らは来るべくしてきたのでござります。そして、それを打ち倒すのがあなた様でござります。」

ウイスパーードは最強の兵器を創るのだろう?

それならなぜ人類全てにそれを渡さない?

「まだ兵器が未完成なのでござります。」

戦術機が第一次大戦の複葉機とするど、我々の所持しているのは超音速ジェット機なのです。

改良もままならず、乗れるパイロットも数少なく、今のところは人しかおりません。

これを仮に公表したところで今の人類にはとても扱える物ではございません。

実際それに近い情報を出しましたが結局今の戦術機程度にしかなりませんでした。

例外として内海、そして閣下の考案した改造型F-4、そして電磁収縮筋がありますが。」

そこまで聞いて一貴は苛つきながら口を開ける。

「それで、私が救世主だというんだな？」

「そうです。間違いありません閣下。」

即答した。

「では私の命には何でも従うのだな？」

「その通りでござります。」

またも即答した。

「私は私自身が救世主だと思わないし、君たちが言う大いなる力についても理解できない。」

君たちが私に付き従うという理由はよくわかつたが、はつきり言って信じられないし、信じたくない。」

「まだその時では無いのです、閣下。」

「それも聞いたが、私は生憎、特定の宗教を信仰している訳ではないのでね。

その気持ちはわからん。

だから私は貴様らの忠誠度を試したい。」

彼らに会つて2時間以上話しているが未だに敬礼しており微動だにしない。

彼らのそれは真実だという事を証明する一つの証拠もある。だが、彼らの身勝手ともいえるメシア信仰には憤りを禁じ得なかつた。

「ディグニファイド13といったな？」

「ずいぶんと昔の組織のようだが生き残りはいるのかな？」

「はつ…」

ペルシャ的な風貌をした50代の男性が前に出てきて膝を下ろし頭を垂れる。

「名は？」

「聖槍十三騎士団 黒円卓第二位 トバルカイン・アルハンブラ」

「よひしい。」

ならば、今回の襲撃騒ぎ、そして私を欺いてきた事の無礼、貴様の死によつて全てを不問にする。」

「これは八つ当たりだ。」

「わかりました。」

なんの迷いもなくダガーを取り出し鞘から抜く。

「お皿汚しをお許しください。

Siegg Heil! Viktoria!」

首に突き刺し回すように搔ききる。

首はカーペットの上に転がり落ち、血が天井まで吹き上がった。

狂っている。

一貴も、そして、その事になんの感情の起伏を表さない彼らも。体内の血を全て吹き出した身体はそのまま前に倒れ込んだ。

一貴の顔には血しづきが付いていた。
それを人差し指ですくい取りなめる。

ああ、越えてはいけない線を越えてしまつたと実感しながら。

「貴様らの忠誠はよくわかつた。」

眼鏡を投げ捨て、踏みつぶし、おぞましい笑みを浮かべる。

それに答えるようにトリファ達は立ち上がり、白いナチスの制服と制帽を差し出し、彼に敬礼をする。

それを受け取り一瞬で着込む。

黒いネクタイをきつめに閉めた後咳払いをし頷いた。

「よろしい、ならば戦争だ。」

征くぞ 諸君。」

一貴もナチス式の答礼をした。

第10話・狂氣の産声（後書き）

ディグニファイド13、本来は12です。

都合上捏造しました。

オルタ”ネイ”ティブ…? オルタ”ナ”ティブに変更しました。
ちょっと違うという雰囲気づくりです。

それはそつと内海専務、凶変しましたね。

これがやりたくて内海さんは登場した言つても過言ではありません。
これからも色々活躍してもらいつのですが…

月詠コンビは1年間でれつでれでした。

本当はその話を作ったのですが没しました。

理由は、初等科の人間がそんな事出来るかっー…といつ考えです。
なので脳内補完してください…

いずれ機会があれば成長後の話で入れようと思つてます。
突然の出来事で今回発言権を得られませんでした。

ショックで頭真っ白です。

男の子、女の子…名前無くてゴメンね！

トバルカイン…噛ませ犬になつてしましました。

伊達男好きなのですが、ごめんなさい。

一身上の都合で2週間程更新する余裕が無くなりそつなので、書き
ためてた話を出しました。
1話分ですけど…。

次回から新しい章（Shōw）が始まります。

それでは。

説明無用！闇話・もしも　がそのまま介入したら（前書き）

電波受信！

暇な時間に書いてしました。

本編とは関係ありません。辻褄が合いません。

説明無用！閑話・もしも　そのまま介入したら

「うん？」は？』

周囲を見渡すと見慣れた艦内だった。

「秋桜、モニターを出せ。ここは何処だ？」

ぶうん。

360度全周囲モニターが目の前にいっぱいに広がる。

『マスター、地球の軌道上を航行しております。
ただ、因果律が狂っているようです。』

「因果律？なんだそれは？」

説明によると自分がいた世界と異なる、つまりは異世界に来ている
よつだ。

あのマッドめ…俺をこんな所に飛ばすとは何を考えているんだ？

「あー、とりあえずネットワークを復旧をやつ。

全周囲探索開始。』

『「あ、キモい！」

「何が？」

『キモい生命体がコーラシア大陸を占領しています。』

秋桜はその映像を拡大してモニターに映し出した。目玉が飛び出た異性体がこちらを見つめている。

「キモ…、BETA?なんだそりや?」

地球圏内のネットワークを復旧したところ、BETAと呼ばれる生命体が地球を侵略し、地球人が滅亡されかかっているという情報が出た。

「お~おい…瀬戸様、といづより樹雷はこれを公認しているのか?
コントクトをとつてみる。」

『いえ、先程申し上げたとおり因果律が狂っているため樹雷は存在していません。』

この世界では、このキモい奴らが宇宙を占領し、ケイ素系生命体が実権を握っているようですね。』

「ケイ素系生命体?なんであいつらが?」

『訪希深様の実験の一つかと…』

「そうゆう事ね。」

三命の頂神は宇宙を、世界を創造した存在で高次元体呼ばれる。有り体に言えば”神”だ。

こいつらは様々な世界を管理し、様々な可能性を探求してきた。以前、訪希深が創造したある次元で”Z”なる強化人間が生まれ、天地さんを殺そうとした事件があった。

「で、何で俺がこんな所にいるわけ?」

『さあ？私は存じ上げません。』

むふう。

面倒な事になつた。

いくら俺だからといって次元を越える事は出来ない。

『マスター、キモい奴らが日本を攻撃しています。』

「日本を？何処？」

『佐渡島です。』

動向をみていると、日本を攻撃しているのではなく、軍が佐渡島を取り返していよいよだつた。

「とりあえずキモいな。」

『ですね。』

銀河法では、地球のような発展途上の文明と接触したり、自らの持つ技術を開示してはならないとある。

しかし、ここにはそのような法律はない！

『マスター…よからぬ事を考えていますね？』

「いやいや、俺はただ単に日本人の為を思つてだな。」

『…でも、一方的な蹂躪は見ていいられませんね。』

話している途中、一部の大型兵器がBETAの集団に飲み込まれようとしていた。

「なら……」

彼の足下が光を通さぬ暗闇に染まり、そこに溶け込んでいった

「柏木ッ！貴様だけでも離脱しろッ！」

「馬鹿言わないでください！ハツチは守っていますから早くッ！」

くく

かといってこれがうまくいくとは限らない。
このままでは私も…そして柏木も…

ハーフランロに従つて、エロー艦隊がA-02への支援砲撃を開始するわくく

香月博士の無線が突然入る。

「一。」

跡形もなくという訳にはいかないけど、何もしないよりはマシでしょう。

レーザー種が出てくる前に済ませたいわ。

早く脱出しないでー！vvv

「りよ、了解ツ！」

いつなつたらこち早く脱出しなければッ！

伊隅大尉はリフトに素早く乗り外部の脱出を試みる。

へへ氣安く近寄るんじやないよッ！くく

>> 柏木！伊隅を乗せたりフトが上かるまで30秒よ！<<

>>了解少!!

「へへしまつた！」のままじや大尉が！.. へへ

八
八
二
一
八

無線の様子がおかしい。

やられたのか！？

「柏木——ツ！？」

周囲は焼かれ、柏木機は辛うじて生き残っていた。

「ははははは！俺も一樣は日本人なんでな！」

糞虫ども！俺が相手してやる！」

急に現れた謎の男が高笑いをしている。

「何をしているのだ！貴様！死ぬぞッ！」

「俺が死ぬだと日本人！これから起こる事をしかとその瞳に刻んでおく事だな！」

その男の手から目映い光があふれ出した。光は徐々に剣の形を成していく。

そして彼の周りには光の翼が六枚出でいた。

「貴様は……」

「死ね、俗物ども。」

この男が跳躍したと同時に目視できなくなつた。
とたんにBETAが血しぶきを上げていく。

BETAの足だけを見事にスライスしていく謎の男。

へへ忠霧...どうしたのよシ...返事なセシ...へへ

「男が…男一人でBETAを蹂躪します…」

「へへな、なんですって～！～～

男は何干といつBETAを殺戮した後、突然立ち止まり、宙に浮いた。

宙に浮いているのである。

「数が多くて虫が退治できない、そんなとき…こんなものがあればとつても便利！」

特製ビット型ハドロン砲～～」

てつてれ～

何故か効果音が流れた。

「ねえねえ、そんな高性能兵器お高いんでしょ～？」

その男は高い声を出し主婦のまねをし始めた。こんな状況で漫才をしている。

「奥さん～、今回だけは特別出血大サービス～なんといJの超小型ビット500個セットでなんと…な、な、な、なんと…8880円…～」

ええ～！！

誰だ驚いている奴！

「へへ伊隅、なによ～れ？～～

「わ、わかりません博士。」

BETAがめがけて接近してくるところに漫才は続いている。

「やつす〜こ〜..」

「今から10秒間だけの限定価格ですー是非是非お買い求めを〜

「ついでにBETAに視線を向けた。

「早速お買い求めのお電話を沢山頂いております。

その数1000万!」

「これはもう、沢山プレゼントしませんとー。
さてさて糞BETAども、たらふく食べな。」「

彼の背から小さな球根の形をした物体が大量に飛んでいった。
それに向かって異常な数のレーザーが空中に放射された。
しかし…

「ば〜か。そんな低出力のレーザーで落とされるかっ！
ちよび丸1000体持つてくるんだな！」

ラザフォード場のようなものがその物体を守り、レーザーが当たら
ない。

「夢を見ているのか…私は。」

ため息が出る。

「バイバイー、肩共、チリはチリに帰れ。」

瞬間、空中からレーザーが、ばらまかれBETAを溶かしていった。
しかし、BETAはまだハイブから出でてくる。

「流石に面倒。秋桜。あそこに打ち込め。」

ハイブを指さし誰かに声をかけ始めた。

「出力は…任せる、地球が吹き飛ばないようにな。」

『了解しました、出力3%、50%圧縮して発射します。
カウント5。』

砲身に熱がこもり始める。

『4、3、2、1、発射。』

小さな球体が地上に落下していく

その日地上全てのハイブは地球から消滅しましたとさ。

チャンチャン

説明無用！閑話・もしも　がそのまま介入したら（後書き）

本編を書く余裕は無かつたのですが、ちょっとした小ネタを書く時間はとれました。

章が終わるごとに「こんなネタを投下していくつか」と思っています。

次回更新は、やはり1週間後になります。

それでは。

第一話・若狭（わかさ）

筆者は右翼でも左翼でもありません。

しかしながら、今回の話はイーテオロギー色が強いです。

読んでくださる方の気分を害するような内容を含んでこる可能性があ

ります。

注意してください。

1983年、日本国内はお祭り騒ぎの真っ最中だつた。

次期政威大將軍、煌武院 悠陽殿下がこの世にお生まれになつた。

今、陸軍、海軍、斯衛軍の三軍が大規模な觀閱式を行つてゐる。脂肪が限界までそぎ落とされた武士もののふが次から次へと行進して行く。皆の眼光は鋭く、一つ一つの動作には一切の無駄が無く洗練されてゐる。

正に威風堂々だ。

陸軍分列行進曲にのせてF-4J改が編隊を組み、轟音と共に田の前を通りてゆく。

会場からは大きな声援と共に「日本帝国万歳！」と声が上げられた。

それを冷ややかに見ている一団がここにいる。

「まったく暢氣なものだ。」

天木一貴は頬杖をつき、足を組みながら呟いた。

「会長へ、そんな事を言つては駄目ですよ。

日本人にとつてはGood Newsなんだから。少なくとも、この厭戦気分を和らげるためには必要な行事だと思ふけどな。」

相変わらず一タ一タと笑つている内海専務はそう答える。

「国民は本当の事を知らない。

いや、知る必要がねえのかな？

坊主、こいつあおめえさんと同じだな。」

榊専務はぼやく。

これは日本帝国の最重要機密である。

煌武院家では「双子は世を分ける忌咒」として、妹の冥夜は遠縁の御剣家へ養子と出された。

「日本の最高指揮官が、あほらしい風習を信ずる…か。」

「我が国は神国なり」馬鹿か貴様らは。

神国であるならば、その神を守護する阿修羅は何処にいる？
何処にもいない。

「我が帝国には神がいる」「神風が吹く」
ふざけるな。

神とあがめる存在にそんな力があるはずがない。
あつてたまるか。

我々日本人は第二次世界大戦の敗北後、何も学ばなかつた。

神は死んだ。

いや、我々が殺した。

ただただ、有り難いものだと信じている。

もし仮に本当に神を信じ、その存在を公認するのであれば、何故、
我々はその神を守るために力を結束させないのか？

本当は誰も信じていない。

この矛盾の中で日本人は生きている。

日本人は本当に卑怯だ。太古の昔からそうだ。
国の頂点にはいつも”神格化”された存在が有り、その背後で国を
動かす政治家達がいる。

肥え太った豚共がそれを人形のように操り、国の実権を握つてきた。
全く持つて腐つている。

私は預言する。

この先B E T Aが日本本土に上陸する事はほぼ間違い無いだろう。
その時この”神格化”された存在が戦線を鼓舞し、日本帝国国民は
結束する。

”危機が訪れた時”に、肥え太った豚共も。

そしてその存在が死ぬまで戦い続けるだろう。
何が起ころうとも。

我々は我々自身の魂をその者に預け、戦うのだから当然だろう?
そしてその魂を預けられた本人は、全日本の、一億人の期待を一人
で背負つて戦い、常に光を示し続けなければならない。

残酷な話だ。

誰もその者の代わりは出来ない。

そして、誰もその者を助ける事をしない。

なぜならその者は”神”なのだから。

そして一度平和が訪れれば皆、神を信じなくなる。
神を必要としなくなつたからだ。

全く卑しい民族だよ、日本人は。

「だからこそ、その風習を続けなければならぬ。
でなければ、自分の存在意義を確立できないから…。」

頭の中で自己完結し、ぼそりとつぶやく。
すると、突然背後からトリファの声がした。

「その通りです、閣下。我々は神を信じていない。
信じているのは高次元体。抽象度の極めて高くなつた存在。大い
なる意志。

それは”我々”であつて”我々”ではない。
そして、それが神なのです。

だからこそ、その御使いであり、我々の救世主であらせられる閣
下のみを信じているのです。”

榊と内海は若干こわばつた顔をした。

それもそのはず。

ここは日本国の人、さらには煌武院家が来ており、厳重な警備が
引かれている。

にもかかわらず、この招かれざる客はたやすくそれを突破し一貴の
背後に立っているのだから。

「その根拠がウイスパード、か。」

当の本人は動じない。

「左様でござります。」

トリファアの言葉を聞いたと同時に、僅かに微笑み言葉を返す。

「貴様らは狂つてゐる。そしてそれを従える私自身も狂つてゐる。」

彼もまたそれを笑みで返した。

「それは私達にとっては褒め言葉でござります。
我々は狂信者ですから」

「　　で、坊主。奴は何しに来たんだ？」

観閲式が終わり会場を出て行く3人組。

通路は赤いカーペットが敷かれており、壁は純白、まるで富殿の様に整備されている。

榊は、先ほどのトリファアが来たことについて一貴に質問した。
「彼はトリファア達の事をあまり良く思っていない。」

自分が開発、正確に言えばリバースエンジニアリングした物を日本仕様に改良したF-4改を複葉機扱いした。

これは技術屋である榊のプライドを大きく傷つける言葉である。

そして、今まで寝る間も惜しんで開発した、自分の息子とも言えるファンタムをゴミとまで言つた。

彼は本当に許せなかつた。

「これだ。」

一貴はそのような経緯を知りつつも、言葉には出さなかつた。

聖槍十三騎士団の基地には一貴も未だに行つていない。
トリファ達は是非に、と誘つてくるが護衛の目を欺くことも出来ず、
それよりも本社の経営の方が忙しい。
そして外付けHDDを強調するよう見せつけた。

「サンタフェ計画。

米陸軍が極秘裏に進めている新兵器開発計画の情報だ。」

「そんなもん手に入れてどうする気でいるんだ？」

「孫氏いわく、敵を知り、己を知れば、百戦危うからず、ですね、
会長」

内海はわかつてゐる、そう思つて少し胸を張りながら説明を始めた。

「まあ、そんなところだ。

これは、通称”G元素”と呼ばれるあれを兵器転用する話で…ッ
！」

突然、目の前に女性が飛び出してきた。

本来こういった情報は外部に漏らさないように自室や、車の中ですることであつて聞かれる可能性があればしてはならない。

一貴は自分がしでかした事に後悔しつつも、腰に差していた刀に手

をかけ、それに2人も同調し行動に移した。

「「一貴！！」

声に聞き覚えがあり、3人とも動きを止めた。目の前に現れたのは、月詠マヤ、マナだった。

彼女らも一貴同様、赤の斯衛の服を着込んでおり、1年前よりは背がのびていた。

彼女たちは慈しむような眼差しで一貴を見つめる。

「一貴殿、大丈夫なのか？

突然いなくなってしまった、私たちは心配したのだぞ…」

最初に声をかけたのはマヤだった。

「それに今は何をやっているのだ？

煌武院悠陽殿下の護衛をすると聞かされているが…」

マナは突っ込んだ事を聞いてくる。

一貴は迷った。

煌武院家の一件は少しばかり思っていることがあるため、正直なことは言えない。

故に少しあはぐらかすことにして、

いつものスマイルを作り彼女たちを見つめる。

「いやあ、一人とも暫く会わぬうちに美人になつたな！」

ピクッと跳ねた。

一貴は気づいていないが、月詠達の頬は少し赤くなっている。

内海、榊は上の歯を出し、「ヤーヤと笑つて後ろに下がつた。

「マナは眼鏡を変えたのかな? シャープな顔立ちになつて、よつきれになつたね。」

そ、そんなことは…と呴いて、しきりに眼鏡の縁を上げたり下げたりしている。

「マナは雰囲気が変わつたな、前より落ち着いて、女性らしい美しさが強調されて…」

…ツ～～～、俯いて肩を振るわせるマナ。

一貴が最後まで言葉を言わないついで、一瞬でファイティングポーズをとり、ゼロ距離になる。

一貴は失念していた。

彼女が攻撃的であることを…

「フゴッ!!

見事な左ボディーブロー決まる。

波動が彼の背中まで見える勢いだつた。

もしこれが一貴でなかつたなら一発KO、間違い無しだ。

「わ、私は前から女性だし、落ち着いていたっ!」

テールライト並に真っ赤になつたマナは腕を組み、そっぽを向きながら抗議する。

「そ、それに……話をほぐらかすなっ！」

マヤも同じような姿勢で訴えてくる。

ばれていたか……、そう思いつつも意識を保つ一貴。

「うぐうううう……

あのなあつーも、もひちよつと手加減つてのは出来ないの、か……

しかし、まあ、いつみてもすゞこ光景だな。

確かに 確かに

と、後ろでは「ソソソソ」と話し込んでいるが、当然一貴には聞こえていない。

「柄にでもない事を言つからだー馬鹿者っ！」

スコーンッ！

頭にグーパンチがクリティカルヒット。

マナも容赦が無い。

「いてええ！これでも天木家当主だぞっ！
丁寧に扱え！敬え！アホどもがあ！」

「内海：地が出しますぞ当主」

「神：最近は命令口調ばっかりだつたなあ。」

「ひめわこ、親の七光り。」

「内海：七光りではないけど……」

「神：ま、そう思われても仕方ない節はあるな、重二郎様もかなり
甘かったし。」

「お前の方が、わいわい！」

「いつもいつも学校では、こんな感じだったな、まったく！」

「「はあ～。地雷を踏むのが得意だな～」」

2人は回避姿勢を取つた。

「「！」

「「そういうえば、一貴。1年前突然学校を出てつたな？
何で私たちに一言もなかつた？」」

じやれていた雰囲気は消え失せ、月詠達の背後には黒いオーラが出ていた。

目は白く光り、まるで獲物を捕らえるかのような姿勢だ。

「なつ……、それは、突然だつたのだ！あれば仕方なく……ツ
榎ツ！内海ツ！くせ者だ、あえであええツ！」

形勢不利と察知したが、いつものこと。

「あ、僕、黒崎君に呼ばれているんだつた。」

「シゲえ！あのファントムの機動はどうなつてんだツ！
整備班全員ぶち殺すぞ！」

内海は車のキーをぐるぐると回しながら出口にスキップしていく。
榎は通信機を取り出しながら叫んでる。

「お、お前ら……俺はお前らの上司だろー助けるよー！」

田を合わせない2人。

後ろには恐ひしい鬼が…

「ちよつといお話しまじょうか、か・ず・き・ど・の」

「いやああああああああッ！」

一貴は襟を摑まれ闇へと消えていく…

「それで…如何なされたのかな？」

紅蓮の田の前にはズタボロになつた一貴が座つている。

ここは紅蓮宅。

客室には一貴と紅蓮しかおりず、田の前にはお茶が置かれていた。

紅蓮は月詠の師匠である。

そのため、おいそれと紅蓮の家には入つてこれない。学校にいた時も避難所としてよく来ていた。

「い、いえ、ちよつと猫に引っかかれまして…」

大体の検討はついている、紅蓮。

哀れに思つたが口には出さなかつた。

「…、心中お察しいたします。崇宰様」

「…」

崇宰…元の名子だ。

紅蓮は知つた。

重三郎が死ぬ1日前、彼の家に一通の手紙が届き、そこには一貴の本当の親の事など様々な事が書かれていた。

「やめてください、紅蓮おじさん。私は天木を継いだ者。」

何となく察した一貴は、それを遠回しに非難した。

「…、失礼いたしました。」

紅蓮も元よりそのように呼ぶつもりは無かつた。

決心したような顔をし、紅蓮はいつもの”おじさん”の顔に戻つた。

「では、一貴！久々に飯でも食つていけッ！」

その場から立ち上がり、背中にビンタを食らわす。

「い、いたつ！あのですね…」

話しながら何処へと動き出す2人。

「はつはつはつ！その様子だと”また”月詠達にやられたのか！」

「ええ…何故か私に暴力を振るつてくれるのですよ。

”あの時”から殺氣は無くなりましたが、事あるじとこ、いらぬ争いごとを持ち込んでくるのです…。

用があるなら、ハツキリ言えばいいのに。」

足を止め、紅蓮の顔色は若干曇った。

「…一貴よ、本氣で言つていいのか?」

「は? どうした事ですか?」

ゴホンッ!、大げさに咳をし再び歩き出す。

「いや、何でもない。そういう事は本人達の間で解決する問題だからな。」

「はあ…」

一貴は困ったような声を出した。

空気を変えるように紅蓮は話を変えた。

「まあ、それはそれなのだが、例の件受けてくれるか?」

次は一貴が足を止めた。

そして、紅蓮の思惑とは違い空気は数段重くなる。

「…、私はかねてより次期將軍閣下の護衛をすると申し上げてきました。」

「…。」

黙つて目をつむり彼の言葉を聞く。

「しかし、守るべき殿下は”2人”おられる。私は同時に2人の殿下を護衛することは出来ない。なれば、共に帝都城におられるべきであり…」

「それは出来ん相談だ。」

彼の言葉を遮り、それを否定した。

「紅蓮”中将”も風習を信ずる者ですか？」

そつと言つて眼鏡を外す一貴。

赤い目からは怒氣が伝わつてくる。

「…ッ！お前の言いたいことはよくわかる。だが、これは決定事項であり、我が国の伝統でもある。こんな世界的な有事の時に、国の上層部で混乱など起らしたくなないッ！」

彼の背景を知るからこそ言葉を選んだつもりだった。

「それが本音ですね…。
確かに貴方の仰る意味もわかつてます。
でも、それでも私は、紅蓮おじさんには賛成してほしかった。
それだけです。」

一貴も紅蓮が反対する理由はわかつていい。

しかし、これが若さ故の過ちなのか、苦しい質問を大人に投げかけていた。

空氣も悪くなってしまい、双方共に食事をする気分にはなれない。

「食事はどうする？」

紅蓮から切り出した。

「いえ、今日は遠慮せいでいただきます。」

戸惑いながらも、一貴は帰る事を選んだ。

「そうか…。」

久々に会った紅蓮は残念そうな顔をする。

「突然お邪魔して失礼いたしました。
またいざれ。」

「ああ、今度はゆっくり来い。」

「はい。それでは。」

一言言つた後外へと出て行つた。

それを縁側から遠い目で見つつ紅蓮は呟く。

「重三郎様…私はどのように返事をすればよかつたのでしょうか…。」

第1話・若さ（後書き）

如何だったでしょうか…

筆者は手に汗を握つております。

先行きの極じい滑り出しどとなっていました…

それでは。

第2話・榎専務の勘定と巨神兵（前書き）

巨神兵…。

本編にはあまり関係ありません。
ではなぜタイトルにしたのだろうか…。
でも、一体ほしいな。

「残念ながら『いいだよ、これは。』

コックピットから出た一貴は厳しい言葉を放った。

「会長、それは言い過ぎですって。」

内海は乾いた笑い声を出しつつ、一貴の発言をフォローした。
それを聞くのは一個中隊のF-4J改パイロット、そして整備員達だ。

彼らは赤の斯衛軍強化装備を着る天木に対し、先ほどまでは尊敬、
そして畏怖の念をもつて敬礼をしていたが、先の発言によつて、憤りへと変わつた。

それを一貴は察知し、戦術機から降りつつ、言葉を改める。

「言い方が悪かつたみたいだな。戦術機そのものの拳動が屑だ。
私の行動にいちいち干渉してくる。これでは私が操縦しているの
ではなく、機体に操縦されている気分だ。」

さすがに耐え切れ無くなり、大尉の階級を受けた一人の衛士が、皆の言葉を代弁するように一步前に出た。

「しかし、それはパイロットを守るための機能でして……」

制止したのは大佐の階級章を付ける榎 清太郎専務。
とある理由で今は軍人となつてゐる。

「黙つていろ、榮二。」

巖谷 榮一 帝国斯衛軍大尉。

この中隊の隊長だ。

「…すみません。」

中隊の前に立ち返礼をしたあと、皆を休ませた。

一貴には階級章が無い。

それもそのはず、彼は9歳であり軍に入隊すらしていない。
しかし赤の斯衛であるが故に、このような態度を眞とする。
そして軍人ではないため、非公式に機体に乗った。
何故乗れるのか…それは”企業秘密”というやつである。
一息ついたところで大尉を見つめ、話し始める。

「その意見はもつともだ。

だがな、過保護なのは乗り手を殺す。

レーザー種に狙われた場合、機体がオートになる。これの手動解除が必要なのが1つ。

あとは〇△だ。」

一貴は今、F-4J改の試乗についての意見を求められ、テストパイロット達であつたこの小隊に感想を述べている。

「実戦で積み上げてきたデータですよー?」

今まであらゆる衛士に乗つてもらい、高評価のみをもらっていた彼らだが、それを真っ向から否定されてしまい、動搖してしまっている。

「聞こえてなかつたのか、榮一。3度目はねえぞ。」

低い声で整備服を着た榎は、腕を組み俯いたまま座つており、諭す
よつこいつた。

「す、すみません。」

「…。」

機体自体の性能に關しては、今となつては何も言つことは無い。
そもそも國産に踏み切ること自体が無謀だったのだからな。」

「…。」

それについては彼らも思つところが合つたのか、榎の言葉からか反論は無かつた。

「で、だ。

OSだが、戦術機そのものが操作されるシステムになつてゐる。
つまりだな…言葉にしづらいが、元々、戦術機の設計思想は一人の力では出来ないことを機械に補佐してもらつ事にある。

鎧が良い例だと思うが、それを纏うことによつて生存率が上がる。
生身の体では弓や刀に対する防御性が著しく欠如しているからな。
ここでの二つの考えが出てくる。

一つは鎧をつけたまま効率の良い動きが出来るように訓練する。
もう一つは、鎧を軽量化しつつも防御力を維持する。

言つている意味がわかるかね?」

「ええ。

つまり天木社長は戦術機の発展を前者…と仰りたいのですね?」

「そうだ。

効率の良いことに見えて実は非効率だ。

人間が持っている本来の能力を制限する形になるからな。」

「ですが、」

またもや反論をしようとしたところで榊は立ち上がり、大尉の胸ぐらをつかんだ。

「てめえ！ 3度目はねえって言つただろ！
ぶち殺されてえかッ！！」

「まあ良い、榊。」

手を前で横に切り、それを抑える。

榊もそれに従い、丸い椅子にかけ直した。

「極論するならば、人間の体をそのまま戦術機の大きさにしてだな。
……」

巨人化した上で鎧を着け、ブースターを付け、敵に見合つ武器を持たせてくれればそれで良い。」

そこまで言つた後、思い出したように満面の笑みをして言葉を続けた。

「そう。

言わば巨神兵、と言つたところか。こんな兵器にしてほし。」

「「「巨神兵？？」」」

聞き慣れない言葉に一同が聞き直す。

それを驚いた顔をして一貴は受けた。

「巨神兵を知らないのか？」

口が、くぱあで、パウツで、キノコ雲だぞ？
本当に知らないのか？

私はあれに憧れて造ったのは良かったのだが、強すぎて星を一つ
潰すところだつたぞ。

あつはつはつはつはつ！

「大丈夫ですか？会長？」

内海は冷や汗をかきつつ一貴に尋ねる。
しかし、彼はおかしくなつたどころか、肌の血色が急に良くなつて
いるように見えた。
活き活きしている。

「私は大丈夫だ。

うん、懐かしいなあ。マッドハイヤされたつけな。

オーマは劇中では不完全だつたけど、完璧にしたらパネエつての
！」

「パネエ？」

口調までも狂つてきている。

榊までも心配するような顔をした。

「この俺が改良したんだから間違いなど無い。

プロトンビームを100発撃つたところで肉体の腐敗は起きない。
ま・さ・に、火の7日間が起きたのも領ける性能になつたッ！
はつはつはつはつ…はあ？

「マッダリて誰だ？私は何を言つていいる？」

「いや…私に聞かれても、ちよつと…」

巖谷大尉は困つた顔をした。

一貴は周りを見渡し不審がられていることを感じ、大きく咳払いをした。

「ゴホンッ！

ま、まあ ASURA改を積めば…」

「「余長…！」」

内海と榊が大声を出し、その先の言葉を止めた。

「ほあつーす、すまん。」

「ASURA改？」

聞き慣れない言葉に巖谷大尉は聞きなおす。

「な、何でもない。確かに良い〇〇なのだが…」

「ちよ、ちよつと余長…」

内海が止めに入った。

「どうやら一貴は焦つているようだ。」

「何ですか？それは？」

「あ～…それはだな、」

「坊主！駄目だ！そりや言ひやがやならねえ…。」

またもや言葉を滑らすとしている一貴の口を榎が塞いだ。

「ちょっとー榎大佐ー内海専務！」

あそこまで彼らがテストパイロットとして育てたF-4J改をけなしておいて、自分たちの情報を隠すというのは、少しijiでは分が悪かった。

それに観念し、息を整えた一貴が情報を漏らした。

「…ijiだけの話なんだが理想のOJSを開発してみたんだ。」

「それで…」

「それが駄目だつたんだな、これが。」

内海がヤレヤレ、といったポーズをとる。

「えつ…」

「確かに理想的で人間の動きそのものになつたんだがあ…」

榎もあijiに手を当ててしみじみと語った。

「人体をそのまま巨大化したような物だからGが半端なものじゃなくなつてな。」

だから乗れるのは私と、ゼファー一位で…」

それに呼応するように一貴も話し始めたが、

「ストップ！それ以上は駄目でしょー会長ー。」

またもや出そうとした。

「えつー！」

驚いた顔をし、眼鏡がずれる一貴。

「えつ、じゃないでしょ、えつ、じゃー。」

今日は帰りましょー様子も変ですしつー！」

内海は腕をつかみズンズンと格納庫から出て行く。

「内海ー！引っ張るなー帰るからッー！」

その後格納庫の外では叫び声が木霊したとかしないとか。

置いてきぼりを食つた彼らは先の発言に對し、ざわついている。

「　「「ASURA改？ゼファー？巨神兵？」」

それに先に答えるように榊は声を上げた。

「お前らの質問には答えてやれねえよ。

これはウチの会社の機密だ。田神兵は俺もしらねえが…。」

ざわつきは止まり、うやむやになつてしまつたが彼らは先の模擬戦のフィードバックをし始めた。

「しかし、まあ、どうしてこうなつちまつたんだろうな。」

榊専務は赤く塗られた、F-4J改を見上げながら呟く。

F-4J改、正式名称、82式戦術歩行戦闘機 瑞鶴

開発主任は榊専務だ。

元々彼は帝国陸軍技術大佐、兼、技術廠・第壹開発局部長であった。その彼がなぜ斯衛軍の瑞鶴の開発に携わったかと言えば、77式戦術歩行戦闘機 撃震をライセンス生産する前の曙計画に参加し、戦術機について右に出る専門家は彼をおいていない、という城内省の判断によるものだ。

だが、その要請を受けた彼は当初、この計画参加に消極的だった。戦術機の事をよく知っているが故に、日本の戦術機産業にこれを独自生産をするには技術差があまりにも開きすぎていると考えていた。

事実、戦術機の専門家が彼一人だけが名指しにされる事が良い例である。

彼曰く、

「もつと米国製戦術機を輸入し研究するべきじゃねえか？」

まだまだ、自国生産には早すぎるし、能力もない。

米国が開発してるのでF-15、頼み込んで配備するのが一番だとおれあ思うがな。」

「さらに言えば、日米仏ソ中英EJ...世界全体で戦術機開発。

若しくは、技術共有つてのが世界を救うんじゃねえか？」

この言葉は連絡員だつた城内省の担当官を困惑させたのは間違いない。

城内省としては、『愛国心』のある日本人であれば喜々としてこの計画に参加してくれるだらつと高をくくっていた節がある。

しかしそうではなかつた。

結局、榊は、『お国のために』と言つて重い腰を上げ、この機体を開発した。

完成したとき彼は大いに喜んだ。

それ以上に周りは、初の「国産」と歓喜した。

実際は純国産では無い上に、F-4を改造したに過ぎず、お世辞にも性能が良いとは言えない。

77式 撃震を第1世代、82式 瑞鶴を第1・5世代とするならば、来年84年に配備されると言われる、米国F-15は第2世代だとする調査結果が天木グループでは出ている。

この0・5世代の間を埋めるためにはあと「10年」の年月が必要だととの考えが共通認識として生まれたのはいつまでもない。

そして今回、次期主力機の国産開発（耀光計画）についての予備調

査として、天木一貴に非公式でF-4J改に乗つてもらつた訳だ。

調査方法は統合仮想情報演習システム「JIVES」を用いた一貴の機体一機と、巖谷 榮一大尉が率いるF-4J改テストパイロット一個中隊（三個小隊）の対戦だつた。

ちなみにJIVESの開発者は一貴と内海専務であり、国際特許を取りつている。

対戦結果は…、一貴の勝利に終わった。
しかも無傷で…。

それでいてF-4J改を「ゴミ」と言つ。

だが、不思議と榎は腹を立てなかつた。
以前、トリファアがこの機体を「ゴミ」と言つたのは正しかつたのだと
思つた。

榎はふと思ひ浮かべる。

自分がF-4J改を「ファンтом」と呼んでいることに。

なるほど、言い得て妙、確かに亡靈だ。

米国に負けた我々日本人の怨念、嫉妬の固まりがこの機体を生み出した。

何とも醜い機体なのか…

榎は胸が苦しくなつた。

そして手元のメモ用紙に走り書きをした。

「第三世代開発不能、イーグル輸入すべき。」

それを握りつぶし、自室へと静かに戻つていくのであつた。

第2話・神専務の苦惱と巨神兵（後書き）

早めの更新です。

たとえ話は何か変ですね、見逃してください。

一貴君…何か思い出し始めましたね。

私のおじさんが見せてくれた初めての漫画。

それは漫画版ナウシカで、私が小学生低学年の時でした。

その内容はとてもグロテスクで、こんな衝撃的作品を読んだ私は、きっと狂ってしまうと感じました。

今ではこんな捻くれた人間になってしまいました。

オーマ（巨神兵）よ！

私を父と呼んで空を飛ぼうではないかッ！

無論、妻はナウシカで…

まあ、毒の光で自分の体が蝕まれるのは目に見えているのですが。でも本命はナウシカだつたりして。

あつークシャナ殿下も…

それでは。

第3話・灯る炎（前書き）

戦術機、武器の一部性能は憶測で書いてます。
公式設定が見あたりませんでした…

しかし、当方では「」のようないくつかの改変をさせていただきますので「」アーティ
ださい。

第3話・灯る炎

紅蓮邸には武道場があり、そこでは無現鬼道流を教えている。木目調の美しい道場は何年も使い込まれた証に、ワックスを塗つていないので関わらず、床は光沢を放っていた。そこに、武道着を着た紅蓮と一貴がいた。

「殿下の護衛は月詠が？」

今日は体を動かすために来た一貴だが、先日、喧嘩別れ？と言つただろうか。

とにかく護衛の件でもめて以来、今日会つのが初めてである。

「ああ、そうだ。」

そんな問い合わせ少し眉をひそめながらも答える紅蓮。

「二人は姉妹ですし、殿下の妹君はマナといつ事ですね？」

「…。

まだそれを言つか。」

一貴には風習によつて分けられた一人を自分の過去に照らし合わせているところがある。

「妹君には変わりありません。
たとえ御剣の姓になつとも。」

「お前は赤の斯衛としてどうするつもつだ？」

まさか、その責務を放棄するとは言わないだらうな。」

まさか、そう思いつつも天木の人間は突拍子のないことをするため一樣聞いた、

「いえ、煌武院家には護衛をすると伝えてあります。」

「どうこうとか。」

「2人を同時に護衛することは出来ない。
それに用詠とは違つて、私には天木グループあります。
しかも、私は崇寧家の”鬼”。
いずれにせよ表立った護衛など出来ぬのです。」

感慨深くうなずく紅蓮。

「ですが…おじさん。
私も日本人であり、赤の斯衛です。
さすれば微力ながらでも、と煌武院家にお伝えしました。」

「ならば？」

「はい、「

息を飲み、彼の答えを待つ。

「解答は…『屋敷内で殿下の執事でござりますッ…』」

「！？」

なにを言つてゐるのだとやつは？
執事…確かに問題は無い。
しかし、何か不吉な予感しかしない。
なぜ満面の笑みなのか？

「執事でござりますッ！…」

2度繰り返しさらなる笑み。

「いや… あのだな…」

「私の研究資材も持ち込んで良いとのお言葉。
不肖、天木一貴、煌武院家に一生ついて行く所存でござりますッ
！」

いいのか？これで？

しかも、研究資材だと？

大丈夫なのか？

「…」

「御剣家はどうにするつもりなのだ？」

そう、彼の拘りである妹の存在はどうするつもりなのか。
本来、聞く必要のないことを紅蓮は聞いてしまった。
一貴は待っていましたと言わんばかりの顔をした。

「おじさん。貴方も人が悪い。

御剣…、冥夜様の武術は貴方が担当する事になつてゐるそうじやないですかあ！」

そ・し・て、無現鬼道流、この道場の”住み込みの”門下生となるツ！

と、なればツ！」

立ち上がりながら、大きく息を吸い込み…

「私が師範代になればイイツ…！」

「な、なに――――ツ！」

まさかの発言、そして情報が漏れていた事に本気で驚いている紅蓮

…。

「フッハツハツハツハツハツ…！私に死角などないツ…！」

さあ、おじさんツ！今すぐ稽古をツ…！」

ファイトポーズをとり、僅かに体を揺らし臨戦態勢をとる。

「…」

無言で立ち上がり、鼻息を荒くする紅蓮。

「そう簡単に無現鬼道流を体得出来るはずが無かるツ…！」
この小童がツ…！」

クワツ…と目が開かれる。

「フフ……」の時を待っていたのだ。

はあ～～～～

丹田に力を込め、空気が震え始める。

「宇宙乃雷イイイイイイイイイイイイイイイツ！！！」

紅蓮の尖った髪の毛からレーザーが放たれたッ！

初めて人体から発せられる光線に一貴は対抗する術もないッ！

「ひでぶつー！」

一貴は何とも言えない声を上げて、天井ごと吹き飛ばされてしまつた。

明るく広い格納庫には、忙しく動く整備兵と機械が大きな音をあげながら作業をしている。

「今ナニ一力の断末魔が聞こえたような……」

そんな中、内海はふと思いついたよつと呟く。

「氣のせいですよ、内海。」

それに軽く答えるトリファ。
ここは南極にある秘密基地。

「まあでも、この「ゴダール」のはどんなもねえ性能だな。」

目の前に佇む白銀に輝く機体は、P1a n1056 「ゴダール」。そのフォルムは中世ヨーロッパの騎士そのものであり、特徴的なは頭部のポニー・テールである。

これは聖槍十三騎士団の大隊長である三人しか乗れない機体で、内海と榎は今初めて機体の性能を間近で見せてもらつた後だった。

「しかし、問題なのはオムニ・スフィア高速連鎖炉の冷却機能、及び、パイロットなのです。」

「ふむ…。」

オムニ・スフィア高速連鎖炉、通称ラムダードライバ、別名、虚弦弾力場生成システムと呼ばれている。

細かい説明は省ぐが、簡単に言つとパイロットがイメージした内容が現実世界で起こせるというものだ。

例えば、敵の戦術機が一機いたとして、その機体が空気によつて圧縮される、というイメージをパイロットがすればペシャンコになる。

このシステムを使用するためには膨大な電力と、それを操るための搭乗者の集中力が必要とされる。

「ダールから一人の長髪、赤毛の少女が降りてきて彼らにナチス式敬礼した。

彼女の瞳孔は開ききつており、興奮した面持ちで名を名乗った。

「Siega Heil！

聖槍十三騎士団黒円卓第九位、大隊長、エレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグ＝ザミエル・ツェンタウア。

階級は少佐でありますッ！」

彼女の戦いはすさまじかった。

相手がリモートの戦術機F-4だつたとはいえ、三個小隊（12機）を僅か30秒で壊滅させてしまつものであり、流石の榊も開いた口が塞がらなかつた。

だが、それも無理はない。

場面はT字路中央で1個小隊が弾幕を張り、その曲がり角で、2個小隊がビルを盾にし援護。

悪くない配置で、敵の接近を許さない布陣だつた。

通常このような状況に合つた場合、こちら側もビルなどの障害物に身を隠し、適度な応戦を行い膠着状態となる。

しかし、彼女は跳躍ユニットが無いのにもかかわらず、敵に突っ込みジャンプした。

確かに、コダールの運動性能は良く、通常の戦術機にはあり得ない

スピードで走ることが出来る。

コダール、最高”自走”速度300km/h。最大作戦行動時間100時間。

F-4は跳躍ユニットを”付けた”状態で最高飛行速度400km/h。最大作戦行動時間1～2時間。

単純に性能だけを見れば第1世代、第2世代…そのようなレベルではない。

しかも、コダールは電磁迷彩システム、通称、不可視モードが可能である。

電磁波全般を欺瞞するステルス、そして存在そのものを田で探知出来ない”熱光学迷彩”。

世界最強の陸戦兵器と言つても過言ではない。

…だからといって、毎分1200発の36mm砲弾に突撃するのは無謀である。

研究者である内海でもこの行為が理解でき、期待はずれ、と言わんばかりにため息をつきモニターから目を外そうとした瞬間、思いもよらないことが起きた。

彼女に向かつて発射された弾丸、そのこと”J”とくが機体の1m先で”溶けて”しまうのである。

そして、見えない膜の様なものがこの機体を包み込んでいるように溶けたそれは後方へ流れしていく。

中央にいた小隊は突つ込んでくる彼女を回避しようと上昇しようと試みるが、すでに遅かった。

「ダールは手にしていた2丁の高周波ガンブレードをドッキングさせ、両刀長巻のような形になつたそれをマニユピーラー上で高速回転し、敵に振り投げた。

高速で回転していくそれは、次第に火を放ち始め、”炎の鎌鼬”が4機諸共、飲み込み消滅。

それと同時、二個小隊の間に降り立つと、双方に手を広げた。

敵は銃口を「ダールに向ける猶予も貰えず、高熱の鉄板に水滴が落ちた音と一緒に、その場から消え去っていた。

こうして、計12機の戦術機は約30秒の間に跡形もなく消滅させられてしまった。

たつた1機の、そして”8歳”少女に…。

「…んんッ！」

内海と榎は、まさか少女が乗っていたとは知らず惚けていた。

それにトリファアは、無理もない、と思いつつも話を始めるために咳払いをした。

我を戻した二人はお互いを見合させ苦笑いをした。

「少佐、彼らは閣下の部下でいらっしゃる、内海専務と、榎専務です。

粗相の無いようにお願いしますね。」

一人はねざりこの言葉と共に手を差し出し、少佐と握手した。エレオノーレはその後、キヨロキヨロ辺りを見渡し始める。

「あの……」

餌を待つてゐる子犬のような瞳でトリファに問いかける。彼は知っていた。

まだ見ぬ我らの主に会えると想つていたことを。しかし、残念ながら彼はここにこない。

「すみませんが、閻トは……」

途中までしか言つていないが、彼女の顔が見る見るうちに沈んでいく。

そんな顔をしたら何も言えなくなってしまう。

「嬢ちゃんは一貴に会いたいのか？」

榊はその状況をくみ取ったのか助け船を出した。

その言葉を聞くと花が咲いたように明るい顔になるエレオノーレ。

「はーッ！」

K a z u k i 、カズキ、かずき…

一貴様といふのですね、我が主はッ！
会わせていただけますか？」

飲み込むよつに彼の名前を呟き、榊の前に詰め寄る。

「お、おこ……そんなにがつつくな。」

「あっ！す、すいません！」

後ろに戻り俯きつつ、モジモジと体を動かせて、あのっ… そのっ… と咳いでいる。

ここにいる整備兵、そしてこの男、三人も顔を赤くしている。

「そ、うん、そうだね。

こんなにす、」一いのを見せてもうつたんだから、『に優美に日本への旅行つてどうかな

トリフアさん』

内海は自分を納得させるように言い聞かせた後、大声で提案した。

「で、でも… 私には『ダールのテストとか、実験がいろいろあるので…』

チラッチラッとトリフアを見る。

ここにある全ての視線がトリフアに集まる。

「な、何ですか…！」

まるで私が悪いみたいじゃないですか…！」

慌てて抗議するが、整備兵は視線をずらす。彼が顔を移すたびに、視線をずらす。

「くあ～～～～～！」

もうつ！仕方ありません！

1週間の休暇としますつ…！」

バツと少女がトリフアに抱きつく。

「ありがとう！ 神父様！！

整備兵はわざと聞こえるよつて出打ちをくる。

どう転んでもトリファに味方は現れるはずのない事だった。

「それじゃあ、準備してきますッ！」

お疲れ様でした！」

トリファア、整備兵を含めた全員が顔を緩めて、格納庫を出て行く工レオノーレに手を振った。

黒いオーラを出しているリザがいる」とも知らずに…

第3話・灯る炎（後書き）

エレオノーレちゃん…

原作の雰囲気ゼロですね、今は。

今作のラムダードライバは魔法みたいなレベルの兵器です。
この位しないと人類の劣勢には到底…ね。

それでは。

第4話・執事たるもの（前書き）

どうせ壊れてくよ……。

第4話・執事たるもの

深夜0時。

帝都を照らす満月は戦時中だと忘れさせてくれる、妙な包容力がある。

そんな中、陽気に煌武院家の敷地内を闊歩しているのは誰か…

それは天木一貴である。

殿下の御前に近いのにも関わらず、このような態度をとるのはこの国で、彼だけでは無かるうか？

「ぬふつ、ぬふふふ…」

不意ににやけ、笑い出す彼。
一体何を考えているのだろう？

煌武院家に仕える女中は一貴を、彼の自室に案内しつつも考える。

一貴様はこの家で執事になる、と言つても有名な武家。
それを蔑ろにすることは切腹に値する。
しかし、彼の素行といつて、武家のそれではない。
やはり天木家の人間。
いくら養子といえど、我々の物差しでは測れないのだろうか。

「天木様、いらっしゃります。」

彼に宛がわれた部屋は非常に広く、なにやらいかがわしい機材が多数運び込まれていた。

つい一週間前、のために受変電設備が新築され、さらにはアロッ

クで隔離された実験室、大型の演算機器数台、そして科学物質まで納入されており、執事ならざる破格の対応をされている。

天木一貴、あの天木グループの社長であり会長。

この待遇が普通…なのか？

「つむ。」苦労。

ほおー、私の資材が全て持ち込まれるとはッ！

うう…閣下、不肖、天木一貴、閣下に一生ついて行く所存でござりますればッ！」

一貴…様は、部屋に入つて周りを見ると、泣いた。

あの奥の透明なフィルムに囲まれた一室と、機材のマーク…あれはっ…！ BIOHAZARDマークと放射性標識ッ…！
大丈夫なのか…？殿下の御身は…？

「ひかりの心配など意に介さず彼は自室を探索している。

「執事服とはこれか？これなのか？
ナイスッ！ナイスすぎるぞおおお…！」

服を見つけたかと思えば雄叫びを上げ、服を上へ投げる。

「はああッ…変・身ッ…とお～～～ッ…！」

な、にッ！

視界が光で遮られるッ！

「ふんッ…！」

なんといつことだ…

一瞬で服を着替えるとは…

「お帰りなさいませお嬢様。

お食事になさこますか？お風呂になさこますか？」

しかも完璧なたたずまい…これが天性の才能ッ…そしてあの眼差し…
女中の体は、ブルッ、っと震える。

私を踏んでッ！ 蔑んでッ！ 一貴様ッ！！

「それとも」の俺かい？」

指ぬきグローブから見えるか見えないかの細い鋼線を出しながら女
中を睨む一貴。

彼女は後ずさり、扉に背中が当たったかと思つたその場にへたり込
んでしまい、なにやら悶えている。

「ハアハア……ウウ……、もつと……もつと……黙つてくださいまし…
一貴様…」

「？」

一貴は状況を掴んでいないのか、口を二角にし、首をかしげた。

「何をやつているのかね？」

…まあ良い。『苦労であつた。』

おもむろに懐中時計を取り出し呟く。

「おおーもうこんな時間か！

殿下の元へ御挨拶に向かわなければッ！ ュウヒたあああああん
ツ！！」

女中の事など完全に無視し、一人全速力で走り出す。

「ハ…アツ…、ハ、これが放置プレイツ…、ウツ」

……。

……。

「一貴殿はまだこんのか…

全く…、殿下…あ奴は変人ですからお気を付けくださいねえ～。

「だいだい～～」

夜2時、月詠マヤは田の下にクマをつくり殿下をあやしている。正直、彼女は限界だった。

毎夜毎夜泣かれては起きてあやし、朝は学校である。

殿下がお生まれになつて早、4ヶ月。
お世話をさせて頂いて3ヶ月目、一貴が来ると聞いてどれほど嬉しかつたか。

この日を待つて頑張つて来たのだ…
そしてマナを出し抜い…

「い、痛い、髪を引っ張らないでください、殿下

「あやーおん！だぶだぶッ…」

物思いに耽つていたマヤを叱るよつて髪の毛を引っ張る殿下。
子供は皆かまつてほしいのだ。

そんなことをしていると突然ドアが開かれた。

「おおっ！殿下あ！」

両手をいっぴに開き、迫つてくる執事服の男。

何とも言えぬ艶めかしい表情をし、若干乱れているネクタイヒヤシ
ヤツからは鎖骨が見えている。

殿下の御前でこの様な醜態を晒すのは誰だッ…！

膝を付き頭をたれる執事。

殿下は、ほけ～っと状況を理解していな～うだった。

「殿下、お初にお目にかかります。

私、今日から殿下のお世話役を賜りました、執事の天木一貴と申します。」

なんと！一貴と戻ったか！？
髪を切つたのか？

「以後よろしくお願ひします、殿下。」

「コッ

破壊力のある笑みをし私までも籠絡される勢いだつた。
？私までも？

「おお～、だッ！だッ！」

あッ！貴様、殿下をたぶらかしたなッ！

「殿下、駄目です。

そんな奴のところへ行つてしまわれてはッ！」

「だいッ！」

マヤが止めるのを拒否するよつて飛び移る。

そして、一貴は慣れた手つきで殿下をおんぶした。
すると、殿下に見えないよつてニヤリッと笑つた。

「殿下は感性の高いお方のようだ。

本能的に”優しい”私に懐くのは道理でしょうね。」

「クッ！そ、貴様あ～～～！」

「おお、怖い怖い、ねえ～殿下。」

先ほどのあべべこ笑みを変えて、同意するなりて殿下を誘導する。

「だあーー。」

肯定してしまひ殿下。

クソッ！なんて奴だ！

手を床に付き頃垂れるマヤ。

「わあ殿ト、私たちは行きませうかー。

マヤはまづくつ休んでな。」

「一・二。」

やつくつと扉を開め出しで行くへ貴。
やつまづの前せ。

マヤは彼の心遣いに感謝し、寝床にすべりおった。

「それでは殿トシ。」

自室に着くなり、殿下を机の上に座らせ声を上げる。

「だー?」

「私の事は”兄様”とお呼びください。」

「だー?」

何についてんだー?、と云つた事を聞く殿。

「こ・い・や・ま・ッ!」

しかし、一貴はめげない。

手で拍子を付けて表現する。

「こ、こ、こ、? ? ?

「おおー! 流石は殿下、物覚えが素晴らしいよ! 」

殿下的頭をわしゃわしゃと撫でる一貴。
それを殿下は嬉しそうに受けている。

味を占めたのか一息入れ、また殿下は言ひ。

「こ、こ、? ? ?

「……。」

一瞬固まってしまった。

「で、殿下ああああああああああ！」

その破壊力に耐えられる者などいない。
こうして、殿下と一貴の夜は過ぎていくのであった。

第4話・執事たるもの（後書き）

少年ウォルター見参ッ！！

あの顔で変なこと言つてると黙つてシゴールですね。
後ろ髪切っちゃいました。

女中……どうしてこうなった…

可愛い子供に”お兄さん”なんて呼ばれたらあめ玉でも何でもあげ
ちゃいます。

遊園地？

いいぞお～何時でも連れてってやる。

ん？実の妹はどうかって？

ああ～何か違うんだよね、やつぱ。

性別関係なく0～3歳はカワイイ。

そんなわけで、

ユウヒたあああああんッ！！

でも椰子なごみ、みたいな子最高。

リアルにいなかなあ？

ただし、ファザコンは勘弁。

しかも、リアルでのシン『ア』レはヒステリー率高すぎ。

無理でしょ。

まあ、だからこそゲームキャラなのですが。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4268w/>

Muv-Luv -3rd story- 世界への介入者

2011年11月23日21時50分発行